

長崎県文化財調査報告書 第75集

長崎県埋蔵文化財調査集報 VIII

1985

長崎県教育委員会

序

遺跡は私達の祖先が残した貴重な文化財であり、その規模の大小に拘らず保護し、後世に伝えて行くことは私達に課せられた課題であります。

昭和44年に文化財課が発足して以来、数多くの遺跡を保護してまいりました。と同時に多くの遺跡の発掘調査も行ってまいりました。これらの発掘調査の記録は、その都度報告書としてまとめて刊行してまいりましたが、時として個人住宅建築や小規模な開発行為の記録保存の刊行は、大規模開発行為のそれの陰にかくれてしまい、漸次遅れて行く結果となっていることも見逃すことが出来ない事実であります。

記録保存は、遺跡の旧状への復原を図ることが出来る唯一の手段であり、報告書の刊行はその最終目的と言えましょう。そういう命題のもとに、これまで行ってまいりました小規模な発掘調査の報告書を「長崎県埋蔵文化財調査集報」という形で昭和52年度に第Ⅰ集を刊行して以来、本巻で第Ⅶ集になりました。収録いたしました遺跡の発掘調査は旧間に属するものでありますが、いささかなりとも埋蔵文化財の愛護と活用に、さらに学術研究に役立つことを祈念してやみません。

昭和60年3月31日

長崎県教育長 伊藤昭六

例　　言

1. 本書は、長崎県教育委員会が行った下記遺跡の発掘調査
報告書である。

I 小栗B遺跡 謹早市 昭和47年度調査
II 帆崎遺跡 小長井町 昭和53年度調査

2. 本書の執筆および編集は田川　肇が担当した。

3. その他詳細は各稿例言を参照されたい。

総 目 次

序

例 言

貞

小栗B遺跡.....	5 ~82
I 遺跡の地理的環境.....	11
II 周辺の遺跡.....	13
III 調 査.....	16
IV 遺 構.....	20
V 出土遺物.....	23
VI まとめ.....	50

帆崎遺跡.....	83~106
I 小長井町の自然環境.....	87
II 小長井町の遺跡.....	88
III 調 査.....	91
IV まとめ.....	95

I 小栗 B 遺跡

—諫早市所在—

例　　言

- 1 本報告書は、昭和47年に実施した小栗B遺跡（諫早市所在）の緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は、長崎県文化課・諫早市教育委員会が主体となり実施した。調査担当者は下記のとおりである。

県文化課	正林 謙
タ	田川 勲
県立美術博物館	橋本幸男
- 3 本報告書の執筆および編集は田川が行った。
- 4 調査時の写真撮影は正林・田川で担当した。整理後の遺物写真は、田川による。
- 5 土器について高野晋司・宮崎貴夫両氏の教示を得た。
- 6 遺物の実測は田川による。トレスは遺物を宮崎美保（整理補助員）、遺構を広川裕子（同）の助力を得た。
- 7 出土遺物は現在県文化課立山分室で保管している。

本文目次

例 言	頁
I 遺跡の地理的位置.....	11
II 周辺の遺跡.....	13
III 調査.....	16
1 調査に至る経緯.....	16
2 調査の概要.....	18
IV 遺構.....	20
甕棺墓.....	21
○第1号甕棺.....	21
○第2号甕棺.....	22
V 出土遺物.....	23
上器.....	23
石器.....	45
VI まとめ.....	50

捕 図 目 次

- Fig. 1 踊早市位置概念図
 Fig. 2 周辺遺跡分布図
 Fig. 3 遺跡周辺地形図およびグリッド配置図
 Fig. 4 土層模式図
 Fig. 5 第1号斐棺出土状況図(%)
 Fig. 6 第2号斐棺出土状況図(%)
 Fig. 7 D-5区(暗褐色土層)出土土器実測図①(%)
 Fig. 8 D-5区(暗褐色土層)出土土器実測図②(%)
 Fig. 9 D-5区出土土器実測図①(%)
 Fig. 10 D-5区出土土器実測図②(%)
 Fig. 11 D-4区(暗褐色土層)出土土器実測図①(%)
 Fig. 12 D-4区(暗褐色土層)出土土器実測図②(%)
 Fig. 13 D-4区出土土器実測図(%)
 Fig. 14 G-4区・G-5区・E-1区・E-2区出土土器実測図(%)
 Fig. 15 G-2区出土土器実測図①(%)
 Fig. 16 G-2区出土土器実測図②(%)
 Fig. 17 G-3区出土土器実測図(%)
 Fig. 18 II-2区出土上土器実測図①(%)
 Fig. 19 II-2区出土土器実測図②(%)
 Fig. 20 H-2区・D-3区・D-1区出土土器実測図(%)
 Fig. 21 出土斐棺実測図(%)
 Fig. 22 出土石器実測図①(%)
 Fig. 23 出土石器実測図②(%)
 Fig. 24 出土石器実測図③(%)
 Fig. 25 出土石器実測図④(%)

表 目 次

Tab. 1 周辺遺跡地名表

図 版 目 次

- PL. 1 遺跡近景
- PL. 2 1 遺跡の説明
2 調査前の供養
- PL. 3 1 出土状況 (石庵)
- 2 同上
- PL. 4 1 出土状況 (碗)
- 2 同左 (脚台)
3 同上 (腰)
- PL. 5 1 出土状況 (底部他)
2 同上
- PL. 6 1 出土状況 (高坏他)
2 同上
- PL. 7 1 第1号甕棺出土状況
2 同上
- PL. 8 1 第1号甕棺合口部
2 同拡大
- PL. 9 1 調査風景
2 同上
- PL. 10 出土上器 ① (D-5区) 1/4
- PL. 11 出土土器 ② (D-5区) 1/4
- PL. 12 出土土器 ③ (D-5区) 1/4
- PL. 13 出土土器 ④ (D-4区) 1/4
- PL. 14 出土土器 ⑤ (D-4区) 1/4
- PL. 15 出土土器 ⑥ (D-4区) 1/4
- PL. 16 出土土器 ⑦ (G-4区・G-5区・E-1区・E-2区) 1/4
- PL. 17 出土土器 ⑧ (G-2区) 1/4
- PL. 18 出土土器 ⑨ (G-2区) 1/4
- PL. 19 出土土器 ⑩ (G-2区・G-3区) 1/4
- PL. 20 出土上器 ⑪ (G-3区・H-2区) 1/4
- PL. 21 出土土器 ⑫ (H-2区) 1/4
- PL. 22 出土上器 ⑬ (H-2区・D-3区・D-1区) 1/4
- PL. 23 B-2区出土甕棺 (1/4)

小學B遺跡

PL. 24 出土石器 ① 表 (½)

PL. 25 出土石器 ② 裏 (½)

PL. 26 出土石器 ③ 表 (½)

PL. 27 出土石器 ④ 裏 (½)

I. 遺跡の地理的環境

日本の西端に位置する長崎県は、県土の大半を半島と島嶼で構成されている。全国一を誇る海岸線の長さは、種々の地殻変動等の結果により作出されたものである。県土のほぼ中央部で三方を有明海・大村湾・橘湾に囲まれ陸部が狭くなる。半島の分岐点ともいえ、大きく西彼杵半島・長崎半島・島原半島と分れる。この分岐点に位置する諫早市は、長崎から国道34号線で約26km、1時間位の所要時間で着く人口8万余人の中核都市である。最近、周辺域が開発整備され急激な躍進をとげ、さらにその重責を全うしている。地理的觀点からも、この自然地形要因が古来より交通体系の要としての役割を謀してきたことが容易に判断がつくであろう。單に、陸路だけに留まらず、海上交通体系の名残りも市内隨所に残る「船越」「小船越」等の地名にみることができる。

北に多良山塊、南に雲仙山塊を控え自然環境に恵まれた諫早市も、地形的には多良岳火山の影響を強く受けおりその噴出物で広く被覆されている。大略的にはその基盤は安山岩類とされ、随所にその露頭を見る。また、市内南西部には第三紀層の堆積岩の分布があり、巷間に「諫早砂岩」と呼ばれ、その緻密さ・堅牢さで定評があり、国指定の重要文化財『眼鏡橋』の石材として利用されている。

一方、平野部に眼をやると、市内を貫流する本明川・長田川・半造川（埋津川）・東大川・西大川と5流の比較的大きな河川は、流域面積は広いとはいえる相対的に距離が短かく、それなりの堆積作用しかみせない。前三者が有明海へ、後二者が大村湾へと注入する。有明海に広大に広がる潟土を干拓により県内で一、二を争う穀倉地帯に変革させていったことは、如実に歴史が物語っている。また、有明海沿岸に残る独特の漁法は自然条件を生活に上手に取り入れた先人の生活の智慧が活かされた結果として、伝習されて來、また行くことは特筆されるべきことであろう。

旧海岸線に臨む低丘陵上には、多くの遺跡が形成されている。先年より調査・報告してきた九州横断自動車道関係の一連の遺跡は、旧大村湾と密接な関係をもっていたし、今次報告の本遺跡およびその周辺域に所在する遺跡群は旧有明海との関係が指摘できる。これらの遺跡の生産背景が沖積地と深い繋りをもって稼動していったことは容易に判断がつこう。

この旧海岸線は、千葉平野地形発達よりみて時期的な変化でとらえられている。即ち、「標高5mが第1海岸線、同3mで奈良期、同2.5mで鎌倉、2m以下が近世初期の海岸線」とされ、遺跡形成および経済基盤の追求に重要な役割を積極的に果しているといえる。

註 高野晋司(1978)「小野古墳の調査」長崎県埋蔵文化財調査集報第1集より引用。

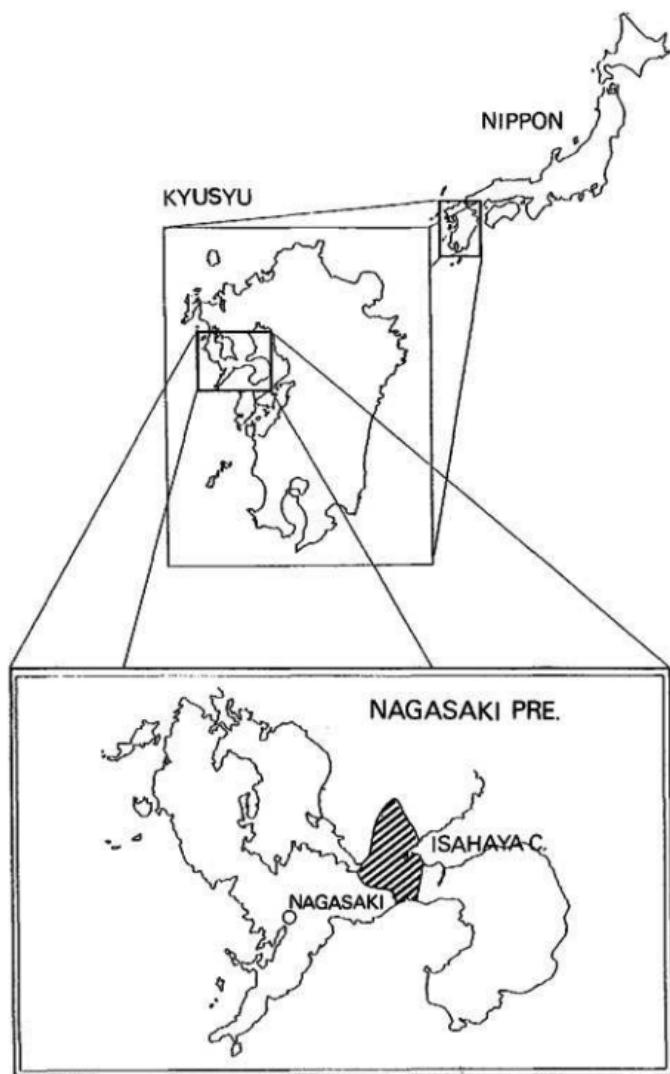


Fig. 1 謙早市位置図概念図

II. 周辺の遺跡

前述のとおり諫早市は三方を海に囲まれており、現在周知されている遺跡群を通観すると旧海岸線にその多くの例を見ることができる。（遺跡の集中密度が高いということは、それだけ良く踏査されているということにもなるのだが…）当遺跡周辺に限ってみても、その地形的特徴は如実にでており、市内唯一を誇る本明川が形成するデルタに臨む周城には多くの遺跡が形成されている。本明川の南を流れる埋津川もその形成に一役荷っていることは見逃せない事実である。北面する標高40～60mくらいの低平な丘陵先端部には、先土器時代から中世にかけての遺跡が多く含まれ、その生産背景を眼前の低湿地および潟地に求めることができる。此地における先土器時代の遺跡は、低丘陵上先端部に位置する立地環境としては比類がなく、類例を求めるならば旧大村湾沿岸の雀ノ倉遺跡・柿崎遺跡・西輪久道遺跡・鹿野遺跡等一連の九州横断自動車道関係および中核工業団地造成関係の遺跡群にできよう。

縄文時代の遺跡として、下組遺跡（20）・尾野大久保遺跡（21）・十仙平遺跡（23）・源内谷遺跡（24）・平山A遺跡（28）が枚挙される。これらはいずれも低丘陵上先端部に位置し、弥生時代の太郎丸遺跡（19）・崎田遺跡（22）・小栗A遺跡（27）・小栗B遺跡（26）・小栗C（林、辻）遺跡（25）等と同様な立地条件下に形成されている。小栗B遺跡から以西の低丘陵先端部には遺跡の確認がなされていないが、充填されるものと考える。

また、弥生時代の遺跡群の中では諫早農業高校遺跡（29）を忘れるることはできない。この遺跡の立地は、前述の低丘陵上先端部と相違して埋津川を伏んで本遺跡と対峙する沖積地にあるとはいえ、前項での標高5m以上の線内に入る。多数の甕棺が出土し破壊されたという。副葬品に細形鋼剣の出土があった。¹¹ 附近は市街化が進み、これ以上の追求ができないのは残念であるが、本遺跡および周辺の同期遺跡群と同様、その生産基盤を低湿地および潟地の可耕地に求めたであろうことは推察するに難くない。

古墳時代になると、此地より少々離れるが本明石棺群（9・10）が有名である。近傍では、その内容等不明であるが水の手遺跡（18）が宗方町にある。小野町には、6世紀前半代に構築された古墳があった。宅地造成の際発見されたもので、緊急発掘調査後、近くの小野小学校内に移築復原された。この附近は宮崎館と呼ばれ、旧石器時代のナイフ形石器をはじめ各時期の遺物が採集されている。また、南の小高い丘は空塹・本丸等の遺構を留める小野城址（17）があり、歴史の重みを感じさせる。

註1 長崎県立美術博物館所蔵



Fig. 2 周辺遺跡分布図

番号	名 称	種 別	時 代	所 在 地
1	東長田貝塚	貝 塚	弥 生	長田町東長田本村
2	東長田遺跡	五輪塔・宝篋塔	中世・近世	長田町58
3	西里遺跡	散 布 地	繩 文・弥生	西里町
4	正津遺跡	々	繩 文 ?	小豆崎町正津
5	中山遺跡	々	繩 文 ?	福田町中山
6	窪ノ谷遺跡	々	弥 生	福田町上平川口字岩ノ辻墓地
7	上横塙遺跡	々	古 墳	日の出町
8	折山頭遺跡	々	繩 文 ?	日の出町折山頭
9	本明石棺群	墓 地	古 墓	前川町内上諏早小学校敷地内
10	本明B遺跡	々	々	下本明町
11	金谷遺跡	鐵部燈籠	中世・近世	金谷町金谷町公民館
12	八天下遺跡	散 布 地	先・繩・弥	栄田町八天下
13	上打越遺跡	々	先 土 器	栄田町上打越
14	永昌遺跡	々	繩 文	永昌町
15	高城址	山 城	中 世	高城町
16	宮崎館遺跡	散 布 地	え番・吉・中世	宗方町宮崎館小野小学校裏
17	小野城址	山 城	中 世	小野町宮崎
18	水の手遺跡	散 布 地	古 墳	宗方町水の手
19	太郎丸遺跡	々	弥 生	宗方町太郎丸
20	下組遺跡	々	繩 文	長野町1360附近
21	尾野大久保遺跡	々	々	長野町
22	崎田遺跡	々	弥 生	長野町
23	十仙平遺跡	々	繩 文	鷺崎町花ノ山
24	源内谷遺跡	々	繩 文	小川町
25	小栗C遺跡	墓 地	弥 生	小川町
26	小栗B遺跡	々	弥 生	小川町林ノ辻
27	小栗A遺跡	々	弥 生	小川町林ノ辻
28	平山A遺跡	散 布 地	繩 文	平山町
29	諏早農業高校遺跡	包 藏 地	弥・古	船越町

Tab. 1 周辺遺跡地名表

III. 調査

1. 調査に至る経緯

昭和43年発見され、長崎大学に搬入・保管されていた斐棺およびその副葬品は、諫早平野に面する標高約40mの低丘陵から出土したものであった。発見地の小字(諫早市小川町字四時秋)をとり、四時秋遺跡と呼称されていた。

昭和44年県教育委員会は、本明石棺群(同市本明町所在)の発掘調査期間中に四時秋遺跡における斐棺発見場所の確認調査を行っている。

時を経て昭和47年10月23日、同町字林、述の宅地造成現場から弥生式土器片が橋本幸男氏によってされ、県文化課へ急報された。報告を受けた県文化課は、急撃正林を現地へ派遣し事態の收拾にあたらせた。その時の所見を正林は次のように報告している。「(前略)工事は緩傾斜が一部削平、一部表土が削離されている。断崖状に切除された断面に深い堅穴状の遺構断面が3箇所見られ、弥生式土器が含まれる。丘頂に近い約250m²の部分は、遺物・遺構が含まれている可能性がきわめて強く、第2期工事の予定されている部分のカメ棺(44年出土)の位置とを含めて、遺跡分布範囲は更に拡大するものと考えられる。」、さらに「工事区一帯は弥生時代中期の生活跡ないし、副葬跡として相当広範囲の遺跡が埋蔵されている可能性がある」とし緊急発掘調査の必要性・重要性を説いている。

その結果報告に基づき、県教育委員会と諫早市教育委員会は開発関係者と協議を重ね、工事を一時中断して緊急発掘調査を実施することで合意に達し、その期間を昭和47年11月9日から11月22日までの14日間とした。

〔調査関係者〕 順序不同・敬称略 (職名は昭和47年当時)

○長崎県教育委員会 福田信行(文化課長)・野中龜夫(課長補佐)・堤 堅(管理係長)
正林 譲(指導主事)・田川 肇(学芸員補)

○諫早市教育委員会 金森 達(教育長)・前山隆志(社会教育課長)・吉田俊爾(課長補佐)・山口八郎(社会教育課)・石原憲城(同)

〔調査員〕 正林 譲・田川 堅・橋本幸男(県立美術博物館・学芸員補)

〔調査協力〕 古賀佐徳(文化財保護員)・古賀 力(同)・近藤吉喜(同)・山部 淳(諫早高校)・池田成彬(野母崎高校)・山本清美(諫早養護学校)
立川 謙(視聴覚ライブラリー)・神代克彦(少年センター)・佐山 政勝(市立図書館長)・土肥和子(市立図書館)

前田幸四郎（小川町老人会長）・野中信行（真津山小学校）・浦嘉美雄（佐世保史談会）・井上登美子（小長井町経済課）・松尾（瑞穂町教育委員会）・本田義親（朝日新聞八坂町販売所）・中川美智子（鎮西短大史学ゼミ）・田中ひとみ（同）・日下正純（同）・勢田広行（同）・前田正毅（同）・坂井康弘（造船人3年）

〔開発関係〕 高島正二（高島商店）・黒木義也（黒木工業）

註1 現在長崎大学医学部解剖学第二教室から諫早市教育委員会へ移管され、諫早市郷土館

に展示されている。個々の遺物については下記の文献に詳しく報じられている。

○秀島貞康（1983）「林、述遺跡」P 5～6 講早市文化財調査報告書 第4集

2 正林 謙氏教示。

3 橋本幸男（1973）「長崎県諫早市周辺の遺跡」長崎県立美術博物館研究紀要 第1

分 長崎県立美術博物館

4 正林氏の感想いで、正式には昭和43年出土。

2 調査の概要

調査は、前述のとおり造成工事を一時中断し実施したのであるが、丘陵末端部はすでに切除されてなく、残存する部分も遺物包含層と考えられる黒色土層と暗褐色土層が削平され、ただ遺物が散乱しており、発掘調査の条件に適合する部分は丘陵頂部に近い極く限られた狭い範囲しかないと判断された。

鎮魂祭後、磁北にあわせて 5m × 5m のグリッドに分割、第2次調査に際しても利用できるように、グリッド番号をそれぞれ北から南へ 1・2・3……11、西から東へ A・B・C……H と付した。A列、B列はブルドーザーにより削平が行われており、特に A-6~9 区、B-6~9 区は荒廃がひどく、調査対象区域からはずした。また、遺物包含層残存の可能性がある北域グリッドおよび南域グリッドを重点的に調査した。

とはいっても、全区域を通じて遺物の包含状況は良くなく、その大半以上がローリングを受け磨耗し、また細片が多かった。土層の堆積状況も良くなく、その多くが流失しており、表土を少し削るとすぐ地山が出てくるという状態であった。しかし、遺跡発見時において採集された遺物はカメの大形破片であり、「どこかに…」という期待のもとに調査を進めていった。遺物包含層として捉えられる暗褐色土層は部分的に残存しており、D-4・5 区、H-1・2 区付近により厚い堆積状況を呈していたが、いずれにせよかなりの傾斜度をもっており流失再堆積の可能性も残されていた。

出土遺物は、前述のとおり磨耗した土器細片が多く、時として大形の破片が発見される状況であった。石器類は少ない。また、遺物の集中地点や柱穴状ビットや土壤らしきものの検出もあったが、それ以上の遺層断面を見せなかつた。

こういう状況の中で G-9 区、B-2 区から小形の合口甕棺それぞれ 1 基づつの出土をみたことは特筆できよう。とくに、B-2 区のそれは合せ口の部分を赤色粘土で封じていた。両者ともほぼ水平に埋置され、墓壙は B-2 区が楕円形であったが、G-9 区のそれは不明瞭であった。いずれからも副葬品は検出されなかつた。土圧による潰れと烟の耕作時による破壊を受けていた。G-9 区の甕棺は上蓋が殆んど、下蓋の半分が消失していた。

調査区域内の土層堆積状況は、ブルドーザーによる削平や畑地の耕作等後世の人の為的擾乱によるもの、加えてかなりの傾斜度をもった丘陵であるための自然的流失等により、よりプライマリーな状況での観察ができなかつた。他地点においての観察では、地山（黄褐色土）の上に遺物包含層と考えられる暗褐色土層、更に上位に褐色土層、表土層の堆積順となる。地点により黒色の弱粘質土層が暗褐色土と褐色土の間にに入るが、これは部分的な堆積層と考えて良いのではないだろうか。該調査区では H-2 区附近に堆積していた。

○調査期間 昭和47年11月9日～同年11月22日 14日間

○調査面積 1,397.5m²

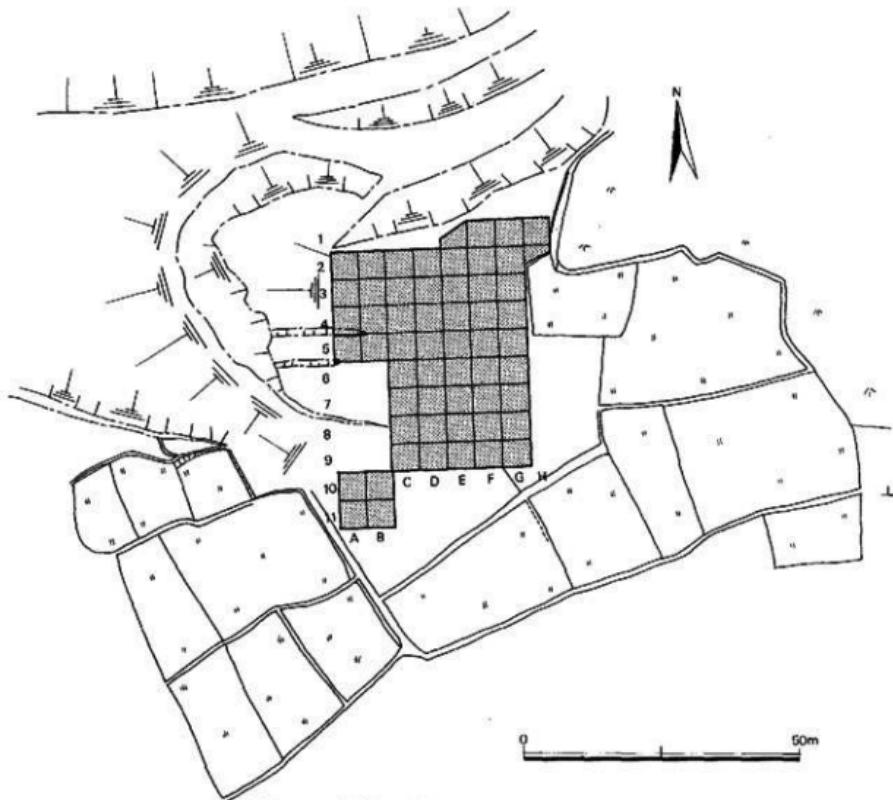


Fig. 3 遺跡周辺地形図およびグリッド配置図

	表土
Ⅰ	褐色土層
Ⅱ	黒色土層（弱粘質土層）
Ⅲ	暗褐色土層（遺物包含層）
Ⅳ	黄褐色土層（地山）

Fig. 4 土層模式図

IV 遺構

調査開始以前および開始時期早々には甕棺墓をはじめとする多くの遺構の検出が期待されたが、いざ調査を開始してみると包含層の自然的流失や耕作および宅地造成等の人为的破壊で、それらは見る影もなく残存していないことが判明した。発見当時、造成断面に堅穴らしき落ち

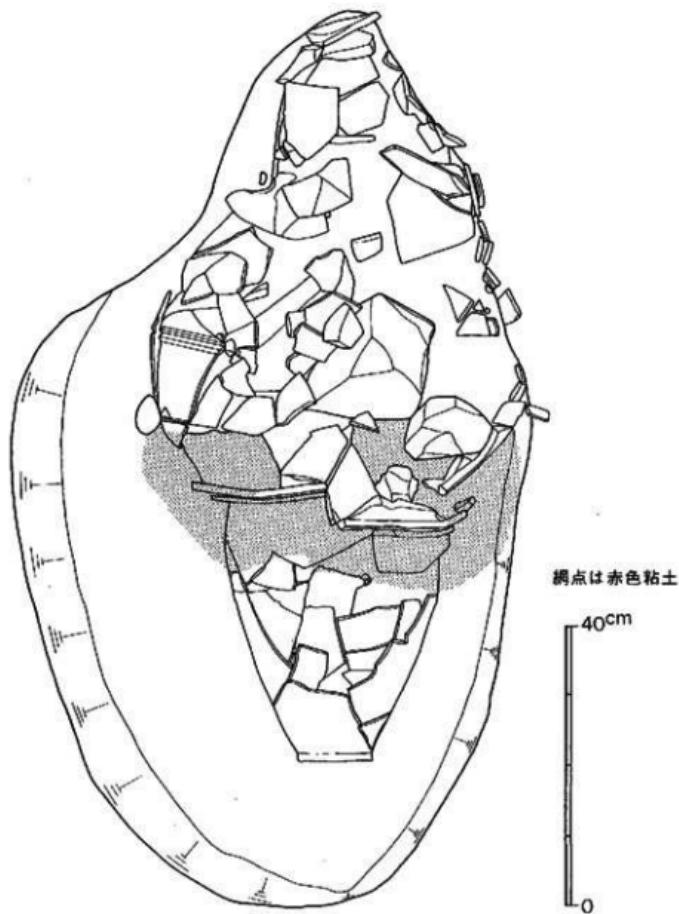


Fig. 5 第1号甕棺出土状況図 (1)

込みが観察されていたが、それらも単なる凹みで遺構としては捉えられなかった。

また、随所に柱穴状のピットの検出があったが同様の理由により遺構として捉えるにはあまりにも弱すぎた。とはいって、表面採集された遺物の中には、祭祠的なものも認められ、甕の大形破片もあること、近接する遺跡に同種の遺跡が存在することなどからして大規模な埋葬址および集落址に期待を寄せたことは当然であろう。

その結果、B-2区とG-9区にそれぞれ1基づつ甕棺墓を検出したに留った。以下、簡略ながらその状況に触れる。

甕棺墓

○第1号甕棺 (Fig. 5, PL. 7~9・23)

B-2区より出土したものである。墓壙は、長径128cm、短径75cmを測る楕円形で、地山の黄褐色土層に掘り込んでいる。掘り方が多少重くなっている。合口甕棺墓で、合口部分には赤色

粘土で丁寧に縫張りをしている。土圧により潰れており疊の混入をみると同時に重機による加圧もあり、取りあげの際細片化してしまった。副葬品はなかった。甕棺中に黒鐵石剣片1点の混入があった。(Fig. 24, PL. 23)

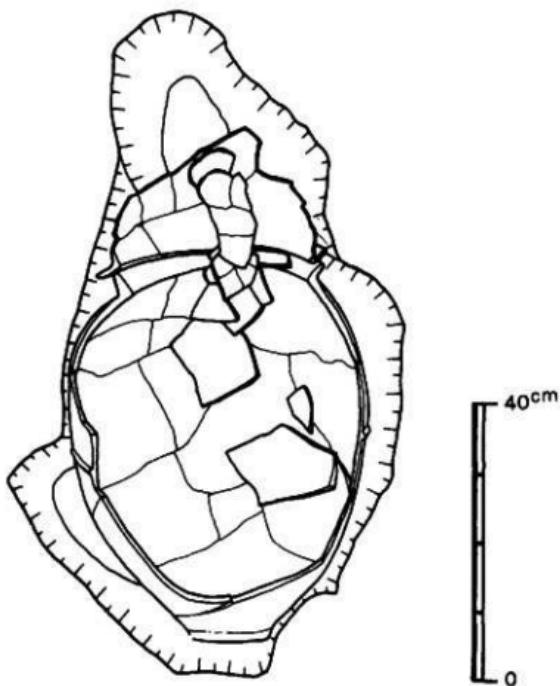


Fig. 6 第2号甕棺出土状況図 (1/6)

○第2号櫛棺 (Fig. 6)

G—9区の出土である。この区は丘頂に近く、耕作時にかなりの削平がなされているところから上縁の下口縁部および下縁の半分を残すのみで他は欠失している。

墓壙は長径で95cm、短径の最大幅49cmを測る。形状は長楕円形である。粉失によるため正確な記述が不可能であるが、推定高約76cm、最大幅約42cmである。口縁部はくの字に曲る。胸部に断面が三角形の凸帯を1条めぐらしている。(下縁)

参考文献

1. 宮崎貴夫他(1984)「今福遺跡I」長崎県文化財調査報告書 第68集 長崎県教育委員会
2. 秀島貞康(1983)「林、辻遺跡」諫早市文化財調査報告書 第4集 諫早市教育委員会
3. 稲富裕和(1981)「富の原常盤遺跡発掘調査報告書」大村市文化財調査報告書 第2集 大村市教育委員会
4. 稲富裕和(1982)「富の原遺跡群確認調査概報」大村市文化財調査報告書 第3集 大村市教育委員会
5. 久村貞男(1981)「宮の本遺跡」佐世保市埋蔵文化財調査報告書、佐世保市教育委員会
6. 正林謙(1971)「諫早市出土の銅劍」『九州考古学41~44』九州考古学会
7. 宮崎貴夫編(1983)「宇久松原遺跡」「長崎県埋蔵文化財調査集報VI」長崎県文化財調査報告書 第66集 長崎県教育委員会
8. 正林謙(1973)「栢ノ木遺跡」松浦市教育委員会
9. 松藤和人・古田正隆・諫見富士郎(1975)「口ノ津貝塚及び口ノ津烽火遺跡調査報告」百人委員会埋蔵文化財報告 第5集 百人委員会
10. 橋口達也(1979)「櫛棺の総年の研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI 中巻』福岡県教育委員会
11. 正林謙(1980)「殿寺遺跡」「長崎県埋蔵文化財調査集報II」長崎県文化財調査報告書 第50集 長崎県教育委員会
12. 藤田和裕(1979)「妙法塚遺跡」「長崎県埋蔵文化財調査集報III」長崎県文化財調査報告書 第45集 長崎県教育委員会
13. 和島誠一編(1966)『日本の考古学IV』河出書房

V 出土遺物

土器 (Fig. 7 ~ 20, PL. 10 ~ 23)

出土遺物の中で数量的に圧倒的優位を占めるのが当然のことながら土器であり、さらにその中で甕の破片が多い。これらの出土状況については先に触れたとおり、遺物包含層の残存が良くなく、しかも部分的に偏在していたため良好な状態での出土は望めなかった。

出土総量は多いとはいえる、その9割以上が細片であり、図示可能なものはそう多くなかった。125点を掲示する。出土層位が明確に解るものの、出土区が確定なものに限った。しかし、殆どの上器片に共通していることであるが、器面の風化が著しく進んでおり、手で持つとザラつく感があると同時に、汚れが移る程弱体化している。こういう状態では器形の岡上復原がやっとで、調整痕等の観察できる土器片は僅か数点しかなかった。

D—5 区暗褐色土層出土土器 (Fig. 7・8, PL. 10~12)

○變形土器 (1~9・12)

1はII縁外径で36.8cmを測る大形の變形上器で逆L字形口縁をなす。内部に軽く突出し直下に僅かに凹みがつく。胴部は僅かに張る程度である。調整痕不明。2・3も1と同様である。

4は逆L字形II縁を呈すが、1よりさらに外反している。内側に細い粘土紐を張りつけて突出させている。口唇部にも粘土紐の張りつけがある。5も4と同様であるが口唇部に丸味がつく。

6はT字形II縁をもつ。8は逆くの字形II縁をもつII縁外径で12.2cmを測る中形の變形上器で外面はタテハケ、内面はヨコハケ仕上げである。胎土は精良。焼成良好。9は口縁部断面が三角形をなし、上面が平坦である。小破片からの復原のため器形に誤りがあるかもしれない。

12は口縁部外径22.6cmを測る中形甕で外面ヨコハケ、内面もハケ仕上げ。

○變形土器底部 (18~20)

18・19・20ともに平底で、小破片であり不詳。立ちあがりが急なため變形土器の底部とした。

○壺形土器 (10・11・13・14・16・17)

10は口縁外径16.0cmを測る中形の広口壺である。11は口径14.8cmを測る同じく広口壺で、器壁が底部に近い程分厚くなる。13はII縁外径36.8cmの大形広II壺で、14は複合口縁の広II壺である。17は突起の上部が凹む。器壁がうすく削落したのかもしれない。風化が著しく観察不能。

○壺形土器底部 (21・22)

21・22ともに平底で、22は内側に粘土を張りつけて三重とし断面は凸レンズ状を呈している。

立ちあがりの部分を指で押さえて整形している。

○高坏 (15)

15は口縁部が逆L字形を呈するいわゆる鋤先形口縁の系譜にあると考えられるので高坏の範疇に入れたが、あるいは脚台付鉢としての可能性も残る。

○鉢形土器 (16)

口縁がややまっすぐにのび、口唇がやや丸味をおびる。碗状を呈し器壁は底部へ向って厚くなる。

以上簡単にみてきたように、器種的には、壺形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏等豊富であり、さらに脚台付鉢も加わる余地を残している。また、壺形土器も広口壺・複合口縁壺とあり風化と洗浄により剥落してしまっているが、間違いなく丹塗りであったであろうと思える土器もある。

D—5 区出土土器 (Fig. 9・10, PL. 10~12)

○壺形土器(23・24・26・27)

23・24ともに長三角形の断面をもつ逆L字形の口縁部で、口唇部端は丸味をもつ。23は口縁の上面が凹む。23が27.2cm、24が27.0cmを測る中形である。26は口唇部と底部を欠損しているが、口縁部はくの字に折れ曲る。調整痕不明。27は口縁部がくの字に曲り、口唇部は丸味を帯びる。口縁外径は16.0cmを測る。

○壺形土器底部 (31・32)

31は比較的厚みをもち脚端部は短かく僅かに張る。胴部との接合部で剥落している。32は底径に比してくびれ部までの高さが低い。内底面は丸く仕上げられている。器内はハケ仕上げ。胴部に脚部を貼り付けている。

○壺形土器 (25・28)

最大幅径34.2cmを測る。頸部以上と底部を欠損する。断面三角形を呈する突帯を2条貼付する。調整痕不明。(25) 28は口縁外径14.2cmの広口壺で朝顔状に広がる。

○高坏 (29・30)

口唇部を欠損するが鋤先状口縁の系統と考えられる。30は円形孔を4箇所配する高坏脚部であり、その穿孔は任意である。台部と坏部を欠損する。風化が激しく詳細な観察は難しいが、

环部に近い部分は指でナデた跡があり凸凹している。

A—4 区暗褐色土層出土土器 (Fig. 11・12, PL. 13~15)

○変形土器 (33・35~38・40・42・47・48)

33は口縁部断面長三角形を呈し、口唇部は薄く作り出されている。口縁部外径28.0cmを測る。内側に僅かに突出する。35は口縁部がくの字を呈し、内側には稜線がつくほど折れ曲がっている。頸部には指でナデた跡が凹んでつく。外面はハケ仕上げ。36・37はともに頸部に指ナデ痕がつく。器壁が底部に近く程度くなる。38は口縁部がくの字に曲り、口唇部は丸く仕上げる。ハケ仕上げ。40は口縁部外径が10.8cmの小形甌で、器壁も薄い。42は2条の突帯をめぐらし、2条とも刻目があるが、磨耗していく不鮮明。とくに下方がひどい。47は刻目突帯を有するものであるが、削落のためか器壁がすごく薄い。48の刻目突帯は指でつまみあげたためか突起状。

○壺形土器 (34・39・41・43~45)

34は口縁部外径16.0cmを測る広口壺で、立ちあがりが短かく口唇部は丸い。器壁は底部に近い程厚い。39と43は相似しており、口唇部は平坦で内側に突出する。43は1条の断面三角形の突帯を口唇部直下に貼付する。器壁は双方とも薄い。41の口縁部は強く外反し、胴部も大きく張る。そのために頸部のくびれが著しいように感ずる。外面はハケ調整。口唇部は丸く、口縁外径で15.6cmを測る。

○変形土器底部 (46・49~52・54)

46・49・52ともに台部が薄く底径が長い。54は分厚く、脚端部が短かい。先端部は丸味を帯び、全体としてすんぐりの感がある高台底である。50・51はともに平底で立ちあがりが急なため変形土器底部とした。

○壺形土器底部 (53・55)

ともに平底。53はわずかに内底面がふくらむ。立ちあがり方、器壁の厚さからして55の方が小さいと思われる。

D—4 区出土土器 (Fig. 13, PL. 13~15)

手づくねの小形品が比較的多く出土している。

○変形土器 (58・60・61・65・67)

58は口縁部上面が半扭で断面が長三角形のもの。器壁は薄い。60も同様。67は平底の大形で現存部で最大幅27.6cmを示す。恐らく大形の変形土器であろう。内面はハケ調整。61・65はいわゆるミニチュア製品である。61は口縁部外径7.8cm、器高6.8cm。口縁部はまっすぐのびて、口

唇部は丸味をもつがやや尖り気味である。平底であろうが少々丸味を帯び不安定。器壁外面は指整形により比較的凹凸が観察されるが内面は不詳。65は器壁は薄く端整に仕上げられているが底が分厚い。くびれが深く脚端部も良く発達している。

○壺形土器 (56・59・62)

56は肩部が残存しており復原値で37.4cmを測る大形壺である。59は複合口縁壺で丹塗りであったと思われる。62は口縁部外径10.4cmを測る無頸壺で底部を欠失する。口縁部は僅かに立ちあがりをみせ丸く仕上げる。胴部最大幅18.0cm。56は円塗り。

○鉢形土器 (57・63・64)

57は口縁がくの字に曲る脚台付鉢と思われるが高杯かも知れない。63・64とともに碗形で63は最大幅10.0cm、口唇部が内側して尖る。丸底。64は丸底であるが薄い。

○壺形土器底部 (66)

脚部も長く良く発達している。脚部の整形痕ナデ。

G—4区・G—5区出土土器 (Fig. 14, PL. 16)

2点出土している。70は壺形土器で口縁部はくの字を呈し、内側には稜線がつく。71は壺形土器の台付底部で全体的に分厚いつくりで脚部も短かい。G—5区出土。

E—1区出土土器 (Fig. 14, PL. 16)

72・74の2点が出土した。72は脚台付鉢形土器の脚台部であろう。74は変形土器。

E—2区出土土器 (Fig. 14, PL. 16)

壺形土器3点(68・69・73)と鉢形土器(75)の計4点が出上した。68は口唇部を欠失しているが広口壺である。69は胴部に1条の刻目突帯をめぐらし、頭部にも断面三角形の突帯をめぐらす。口縁部はあまり外側していない。73は胴部最大幅12.6cmを測る小形の壺形土器である。

75は口縁外径11.6cmを測るいわゆる碗形鉢で平底。底部から急激な立ちあがりをみせ、口唇部は丸くつくり出す。2本の稜線がつく。69は丹塗り。

G—2区出土土器 (Fig. 15・16, PL. 17~19)

16点出土した。そのセット内容は変化なし。

○壺形土器 (76~79・90・91)

76はくの字形を呈し、口縁部に指ナデによる凹みがつく。内側に稜線が入る。77は口唇部上

面にナデによる凹みがつく。78は逆L字で口唇部が基部より太く丸く仕上げる。口縁部にナデによる凹みがつく。口縁部外径27.6cmを測る巾形斐である。79は逆L字形で長三角形の断面をもつ。上面は僅かに凹む。器壁が薄く、胴はあまり張らずに底部に至る。91は口縁部、底部を欠失する。器壁がうすく直線的な立ちあがりをみせる。90はミニチュア斐の底部である。

○壺形土器 (80・82・83)

80は屈曲部で強くくの字に内傾し、口唇部は丸く仕上げる。83は刻目突帯を有する。82も口縁部は強く屈曲するが80ほどではない。口縁部外径で10.4cmを測る小形の壺形土器である。

○鉢形土器 (81)

口縁部外径9.0cmを測る小形の椀形で、口唇部が内側に僅かに傾く。

○壺形土器底部 (84・87・88)

84は脚端部が長く、くびれ部も著しい。底部は比較的薄い。87は底面の広がりに対してくびれ部が小さく、胴部の立ちあがりも急激である。損壊部分の直上くらいで段がつき広がって行くと思われる。88は全体的に厚ぼったく脚端部も短かい。

○壺形土器底部 (85・86)

両者ともにあげ底で接地部に角がつく。86は粘土の接合が比較的良好観察でき、接地部、さらに内底面に貼りつけている。

○高环脚部 (89)

环の接合部から削離している。

G-3区出土土器 (Fig. 17, PL. 19・20)

○壺形土器 (92~95・100~102・105)

92・93・94は口縁部断面が三角形をなし、上面が平坦なもの。95も同様であるが胴部の張り方がより強くなると思われる。100は口縁部がくの字に曲るもので調整はハケ。101・102とともに上部および底部を欠失している小形の壺形土器である。

○壺形土器 (96・97・99)

96・97両者とも広口壺の破片で、口唇部はやや丸味を帯びる。99は突帯がつく。器面の風化が著しく器面調整痕不明。小形である。

○鉢形土器 (98・103)

破片が小さく傾きが良く解らないが高環かもしれないが脚台付鉢形土器とした。103は口縁部が内側に深めの肩部を有するもので突帯が2条つく。口唇部は平坦であり、脚台がつくとされる。

○壺形土器底部 (104・105)

104・105ともに平底である。104は器壁より底部の方がうすく作出されている。105は内底面に指圧による凹凸がある。

H-2区出土土器 (Fig. 18~20, PL. 20~22)

○壺形土器 (106~115・117)

106は肩部に1条の突帯をめぐらす径が48.0cmを測る大形の壺形土器である。107は刻目突帯を2条有している。調整は内外面ともにハケ。最大幅34.8cm。108は最大幅42.2cm。109は肩部に1条の突帯を施す最大幅45.2cmを測る大形壺形土器である。長頸壺の肩部であろう。110は口縁外径31.0cmを測る広口壺で、口縁は逆L字形に立ちあがり口唇は丸くつくる。内側に突出し稜線がつく。111は肩部から口唇部にかけて急激にくびれ、口縁部は強く外反する。断面はくの字形を呈し内側に稜線がつく。112は直立気味の頸から急激に肩部が張る。口縁は逆L字形で強く折れる。突帯を1条有す。113は現存部最大幅38.8cmの大形でハケ調整。肩部に低い突帯を1条貼付ける。114は口縁部外径23.6cmを測り、口縁は朝顔型に大きく外反する。口唇部は下方にやや突出する。口唇部外縁に刻印をつける。115はゆるやかな張り出しの肩部から急激に直立気味に立ちあがりくの字形の口縁部をつくる。内側に稜線がつく。口唇部はやや尖がり気味に丸い。117は肩部最大幅が13.6cmのミニチュアの広口壺で、肩が張り、底部近くで器壁が肥厚する。いずれも調整痕不明。

○高環 (118)

体部のほとんどと脚部を欠失する。

○壺形土器底部 (121)

脚部端はやや尖がる。くびれ部は著しいが、高さが低い。

D-1区出土土器 (Fig. 20, PL. 22)

116は口縁部外径24.8cmを測る中形の壺形土器で、口縁部はくの字形を呈し内側に稜線がつく。口唇部は丸く仕上げる。くびれ部にナデによる僅かな凹みがつく。

D—3区出土土器 (Fig. 20, PL. 22)

119は變形土器の高台部で、脚は短かく脚端は丸い。120は壺形土器の底部であろうか。半底である。直徑7.7cmを測る。僅かに角がつく。122は台付鉢形上器の脚台部で、体部との接合部から割離している。脚内部に指で押した整形痕を残す。

石器 (Fig. 22~25, PL. 24~27)

出土遺物中土器量に比して少い。総点数71点を数え、黒耀石の剝片が比率的には一番多く、56%を占める。これが石器組成のすべてではないが、一応弥生時代の特徴を示す石器群を構成しているといえよう。それぞれに特徴的なものを図示した。

○スクレイバー (Fig. 22—4・7・8, Fig. 25—11, PL. 24~27)

4は黒耀石で縱長の一次剝片を利用している。端辺部に二次調整を行い刃部としている。断面は三角形を呈す。8は横広の黒耀石を利用したもので側辺に細かい二次加工を加えて刃部としている。図中黒く塗り演してある剝離は、明らかに近年の耕作等による新しいものと判断されるもので、他と區別した。ポジティブ・バルブ周辺には無数の擦痕が観察される。方向は、縦、左右斜め、横と規則性はない様に思える。この遺物にのみ観察されるところから、その意味するところは不明である。7は尖頭状の形状をし、断面が菱形を呈する。1側辺のみリタッヂを加える。安山岩製。11は大形の安山岩製で、6.1cm×4.3cmを測る。大きい剝離作業が施され、断面も分厚い。

○扁平片刃石斧 (Fig. 23—12・13, PL. 24・25)

12・13ともに中央部付近から折れており、刃部は欠失している。12は残存部で長さ4.1cm、最大幅3.0cm、厚さ0.9cm。短骨形で面取りしている。丁寧な仕上げで、頂部は角をとり、丸く仕上げる。僅かに研磨痕が斜め方向に観察される。節理面からの剝離がある。13は未製品と考えられる。

○石庵丁 (Fig. 24—19・20, PL. 24・25)

20は完全に研磨された片刃で、両面からの穿孔を2個有する。丁寧な研磨である。左右2ヶづつを失つ。僅かに研磨痕が残る。紐擦痕は観察できない。19は安山岩で表面はかなり風化している。僅かに彎曲しており片刃状を呈する。未製品として取り扱った。

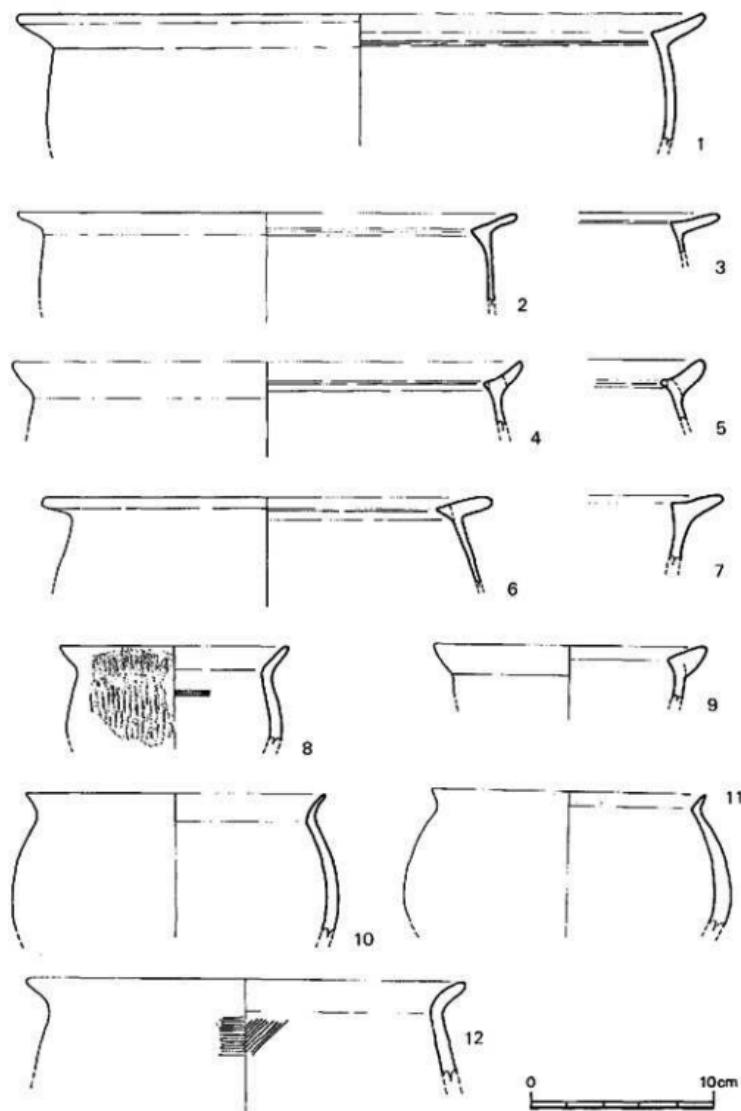


Fig. 7 D-5区(暗褐色土層)出土土器実測図① (1)

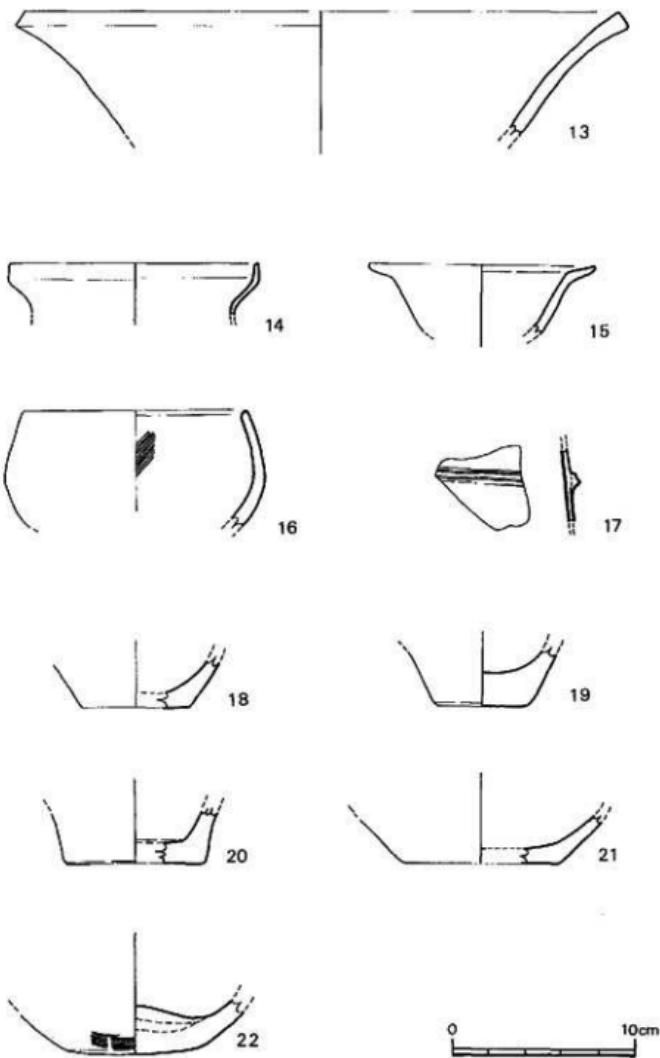


Fig. 8 D-5区(暗褐色土層)出土土器実測図②(1/4)

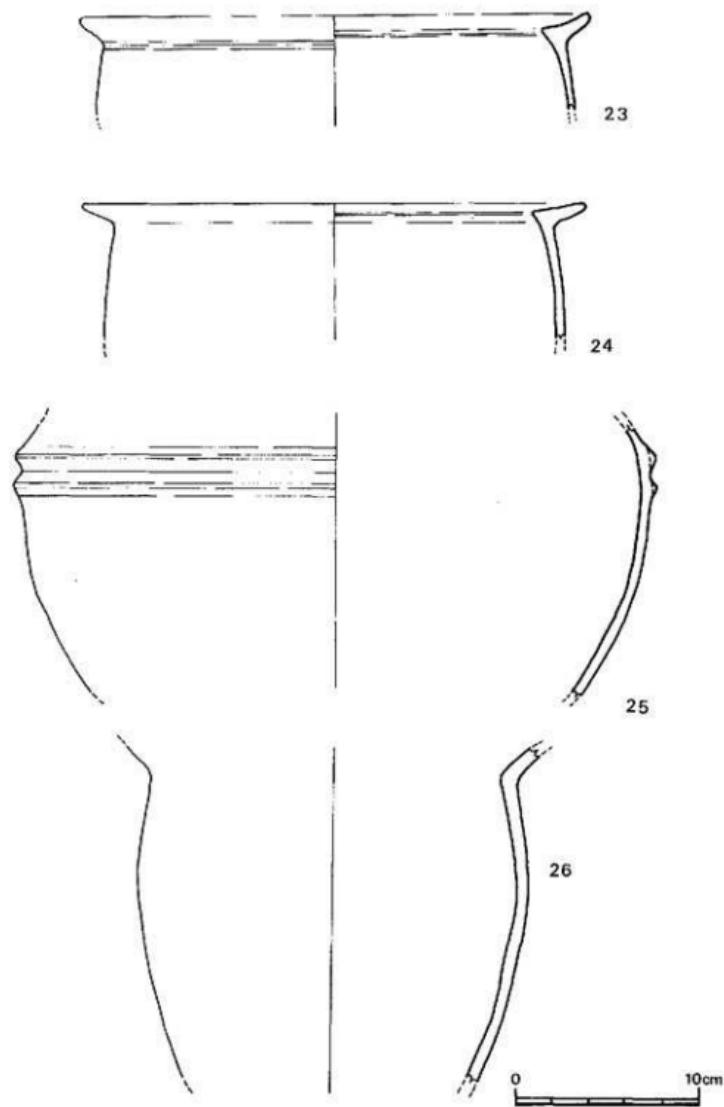


Fig. 9 D-5 区出土土器実測図 ① (1/4)

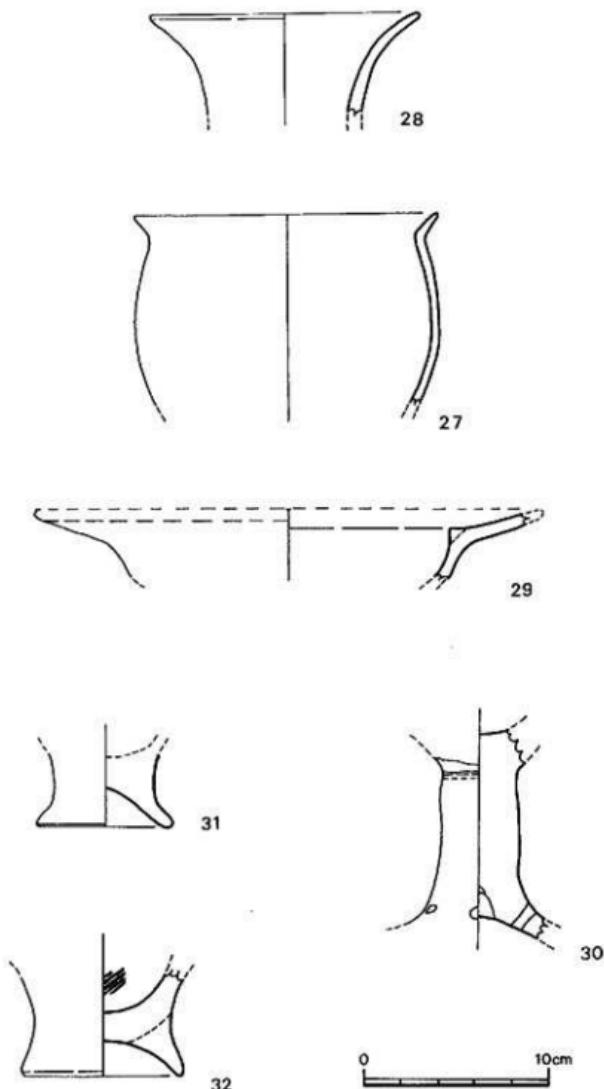


Fig. 10 D-5 区出土土器実測図 ② (1)

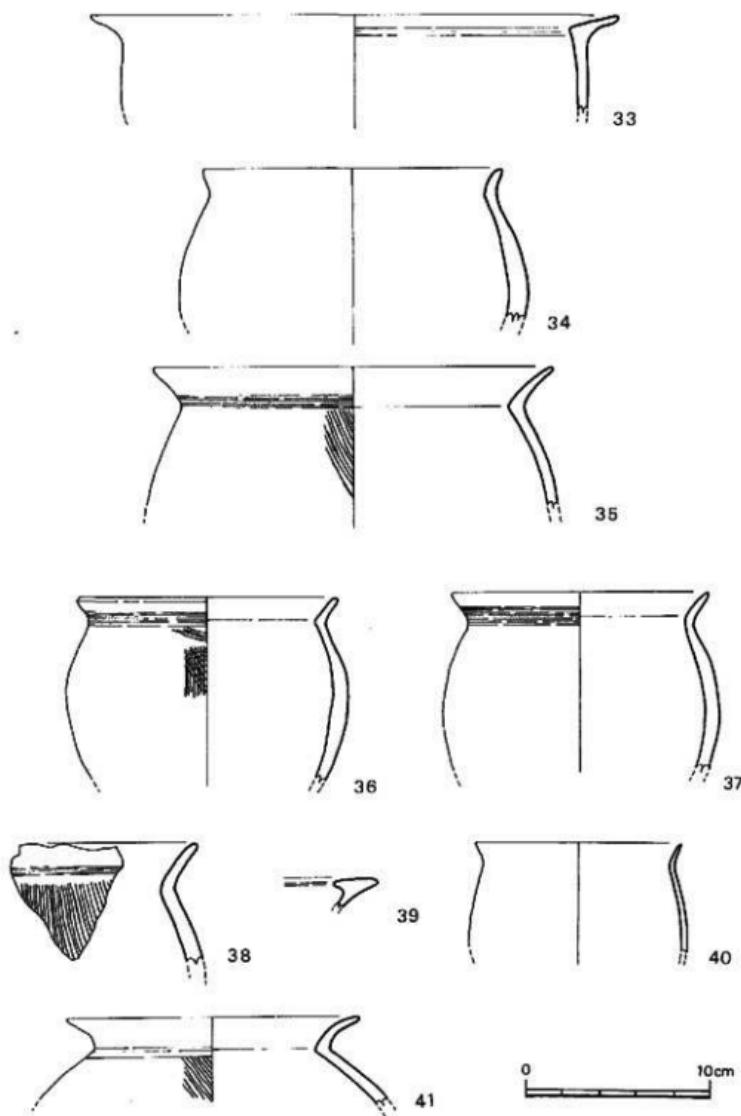


Fig. 11 D-4区（暗褐色土層）出土土器実測図 ① (1/4)

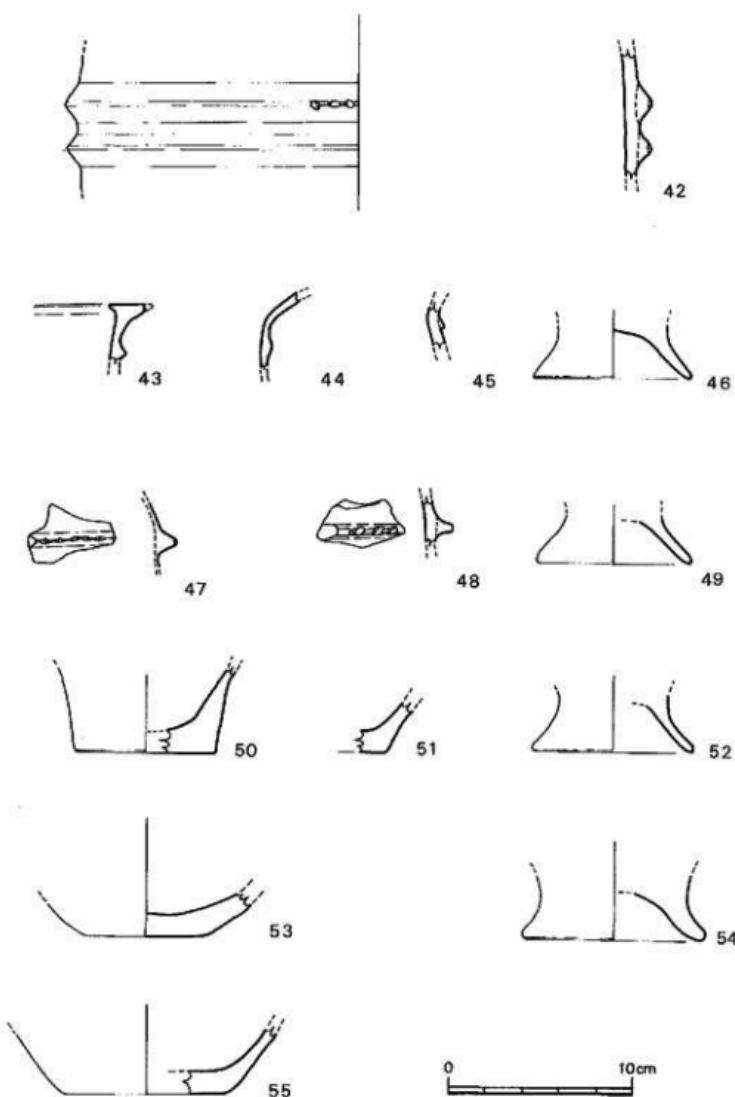


Fig. 12 D—4区（暗褐色土層）出土土器実測図② (1/2)

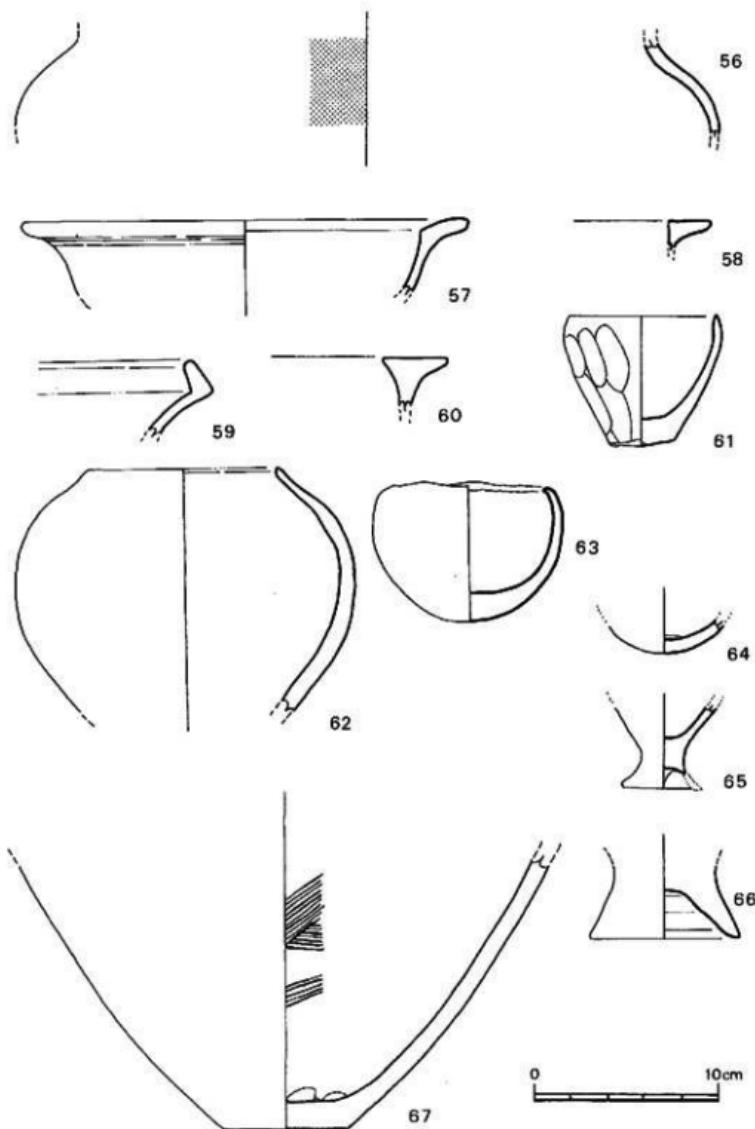


Fig. 13 D-4区出土土器実測図 (少)

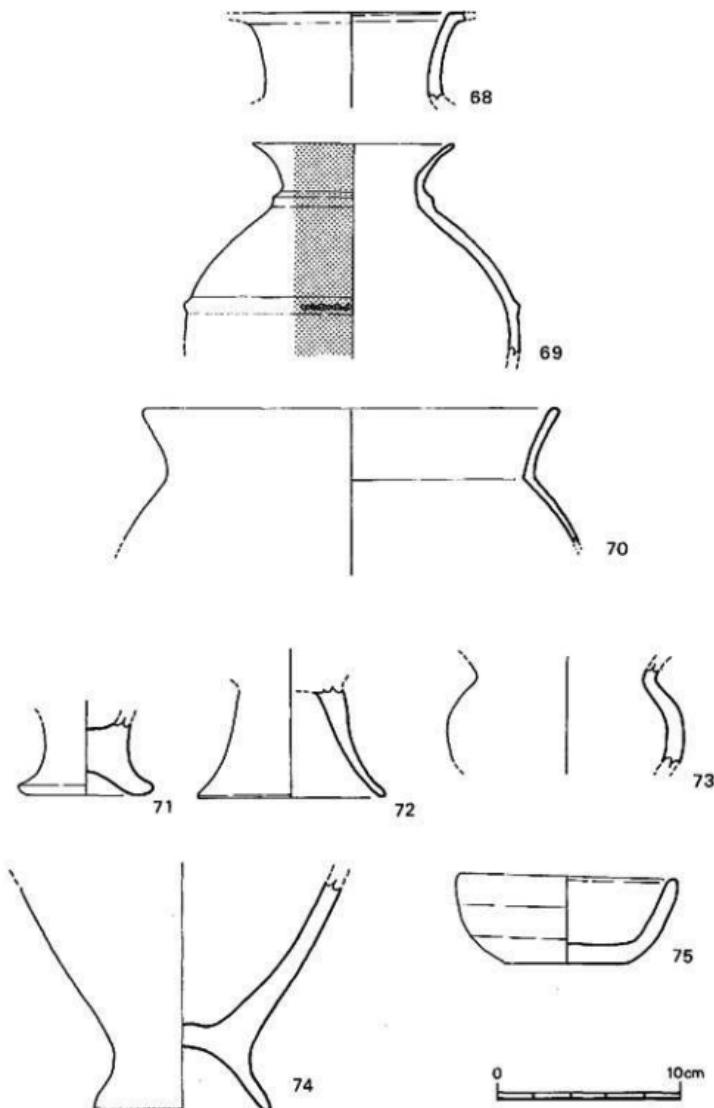
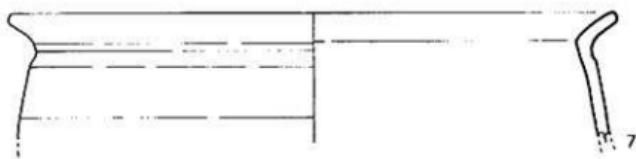


Fig. 14 G-4区・G-5区・E-1区・E-2区出土土器実測図 (14)



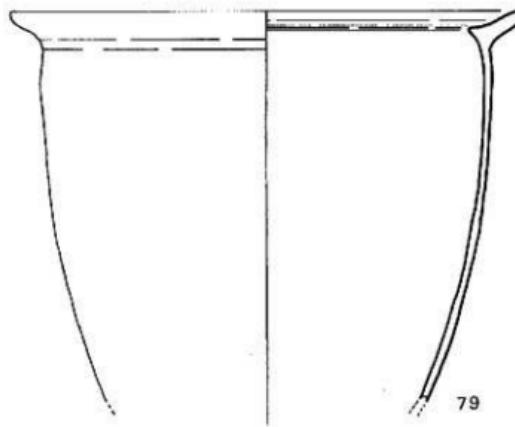
76



77



78



79



Fig. 15 G-2区出土土器実測図 ① (1/4)

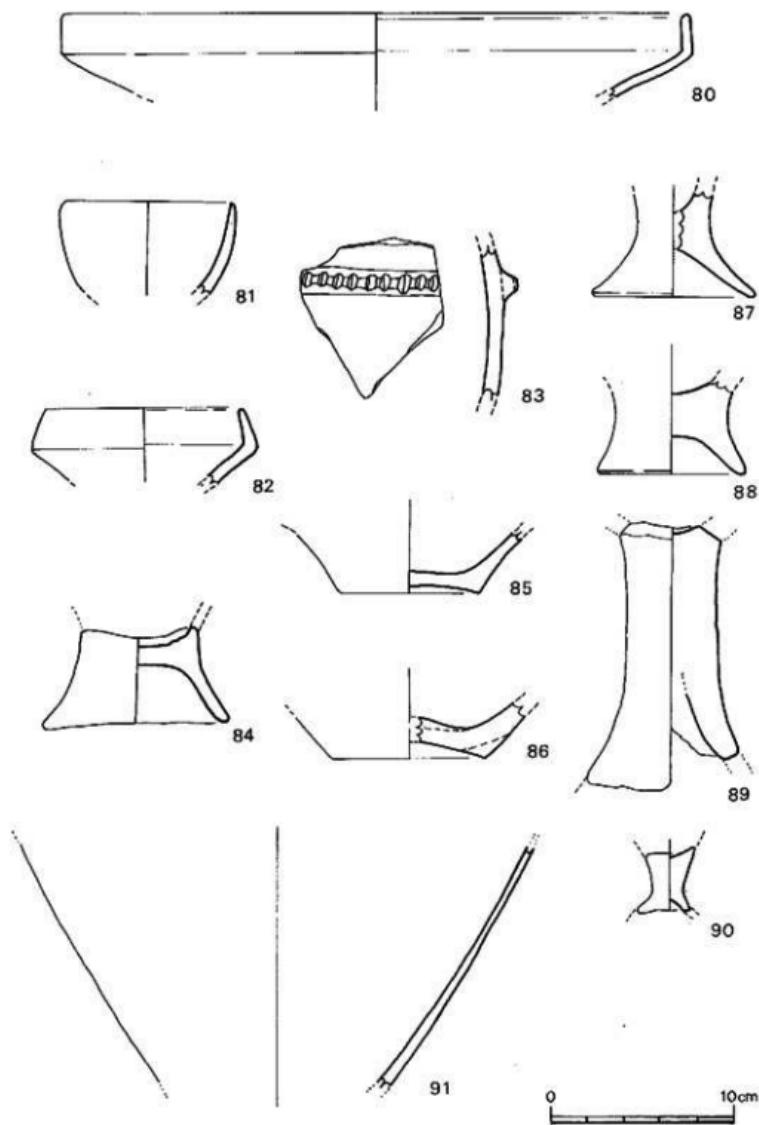


Fig. 16 G-2区出土土器測定図 (2) (1/4)

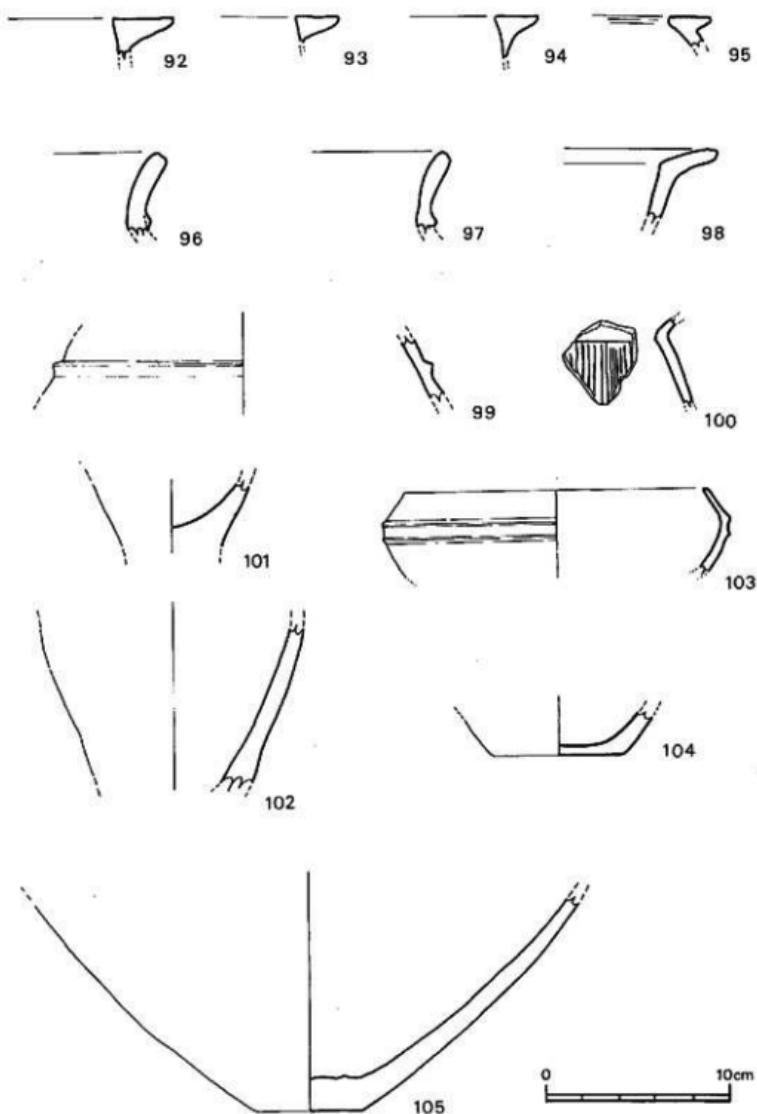


Fig. 17 G-3区出土土器実測図 (少)

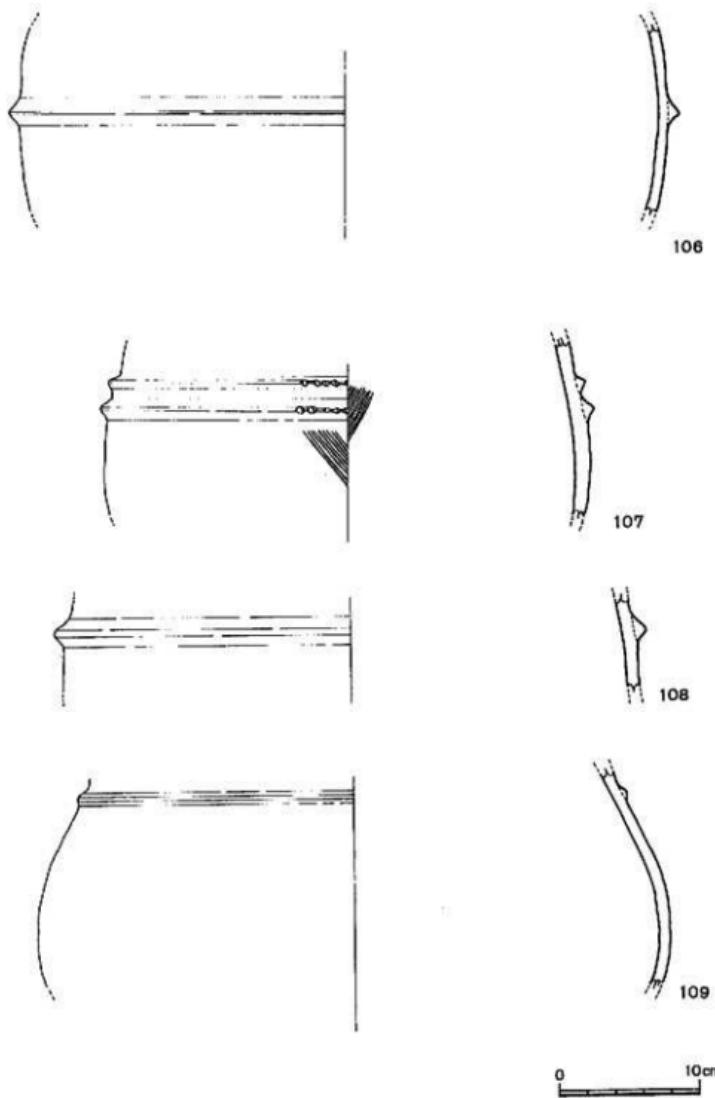


Fig. 18 H-2区出土土器実測図 ① (1/4)

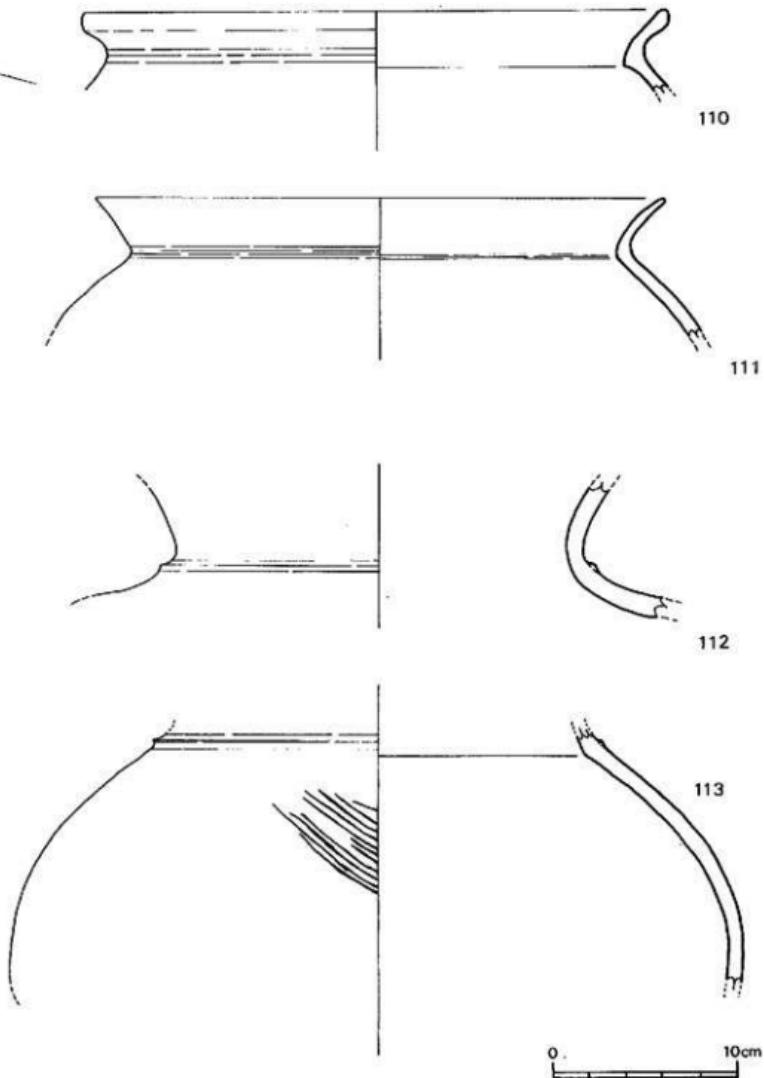


Fig. 19 H-2区出土土器実測図 ② (14)

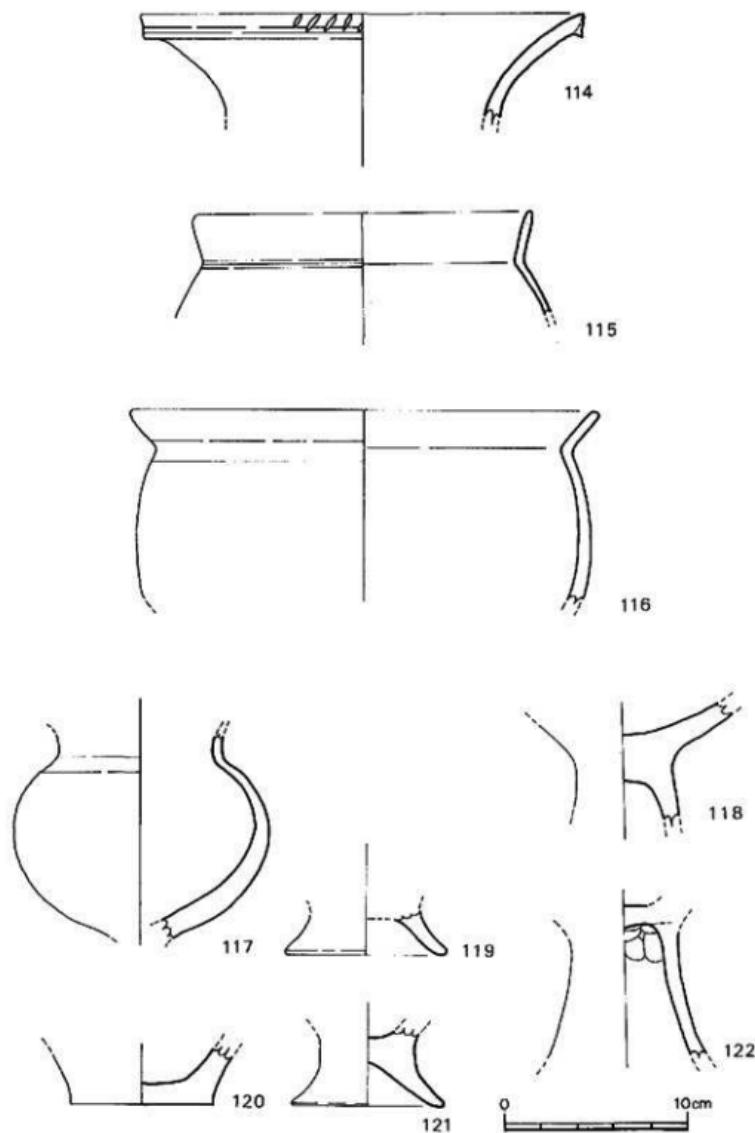
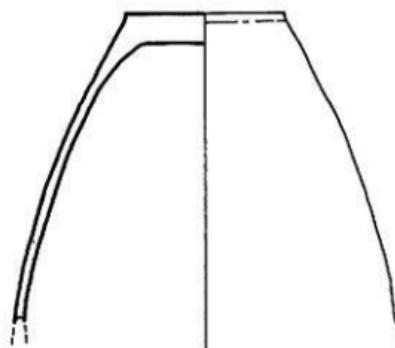
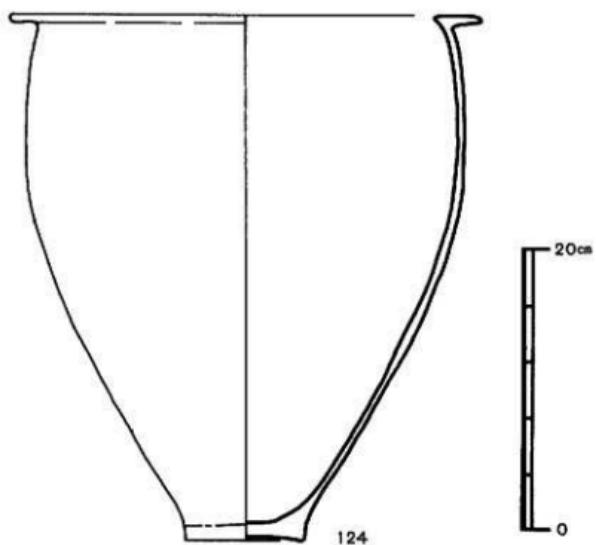


Fig. 20 H-2区・D-3区・D-1区出土土器実測図 (1/2)



123



124

Fig. 21 出土甕棺實測圖 (1/4)

○磨製石斧 (Fig. 24-21, PL. 26・27)

長さ9.8cmの片刃で、断面は蒲鉾形を呈する。表面がかなり風化を受けザラつきの感すらある。安山岩類であろう。

○凹石 (Fig. 25-22, PL. 26・27)

径9.8cmを測る。表裏中央に径2cmくらいの凹みがある。周囲も良く研磨されている。両面に着いた擦痕は後世のもの。

○石皿 (Fig. 23-14~16, 25-23, PL. 24~27)

15は破片である。節理面から剥落したものであろう。表面は平滑でスペスペしている。砂岩。16とともにあるいは砥石の一部かも知れないが不明。16も破片である。表面が僅かに凹むが、図示できにくい程度である。14は比較的大きな破片であるが、やはり節理面からの剥落で、原形、原法量等不明である。縦と横に2cmくらいの長さの擦痕が観察されるが、それ以上の進展は見ない。23は全体形状二等辺三角形を呈するもので、一部に欠落がある。かなりの使いこみがみられ、両面とも彎曲する。特に表面は梢円形に凹んでいる。厚さ2.2cm。

○砥石 (Fig. 23-17・18, PL. 26・27)

砥痕が多く残っており、砥石とした。その方向は肉眼観察で横位と斜位の2方向のみであり、全面には見られない。節理面から剥落して、別地点から出土した18と接合する。18には砥痕は認められない。

○使用痕のある剥片 (Fig. 22-3・9・10, PL. 24・25)

3は縦長剥片の打点側を折り取って使用している。片エッジ部にのみ刃こぼれを観察する。黒耀石。9は縦長の剥片の利用であるが、両側刃に刃こぼれ痕をみる。10は不定形剥片の利用で側刃には調整剝離が施されている。この点からすればこの項に入れれるより、9とともに「加工痕のある剥片」として立項させた方が良かったかもしれない。両者とも黒耀石製。

○剥片 (Fig. 22-1・2・5, PL. 24・25)

出土した石器類の中で数量的には一番多い。3点のみピックアップした。1・2はともに縦長の剥片の両端を折り取っている。5は舟底状を呈している。一見細石刃母核風。

〈第1号甕棺内出土の剥片〉 (Fig. 24-24, PL. 24・25)

黒耀石の剥片である。主要剝離面を残す不定形な剥片で、右側刃にノッチ状に剝離行為を行っている。使用痕であろうか。細かい刃こぼれ状の剝離が見られる。甕棺内からの出土であるが、礫の混入等もあり流れ込みによるものと考えられる。



Fig. 22 出土石器實測圖 ① (3)

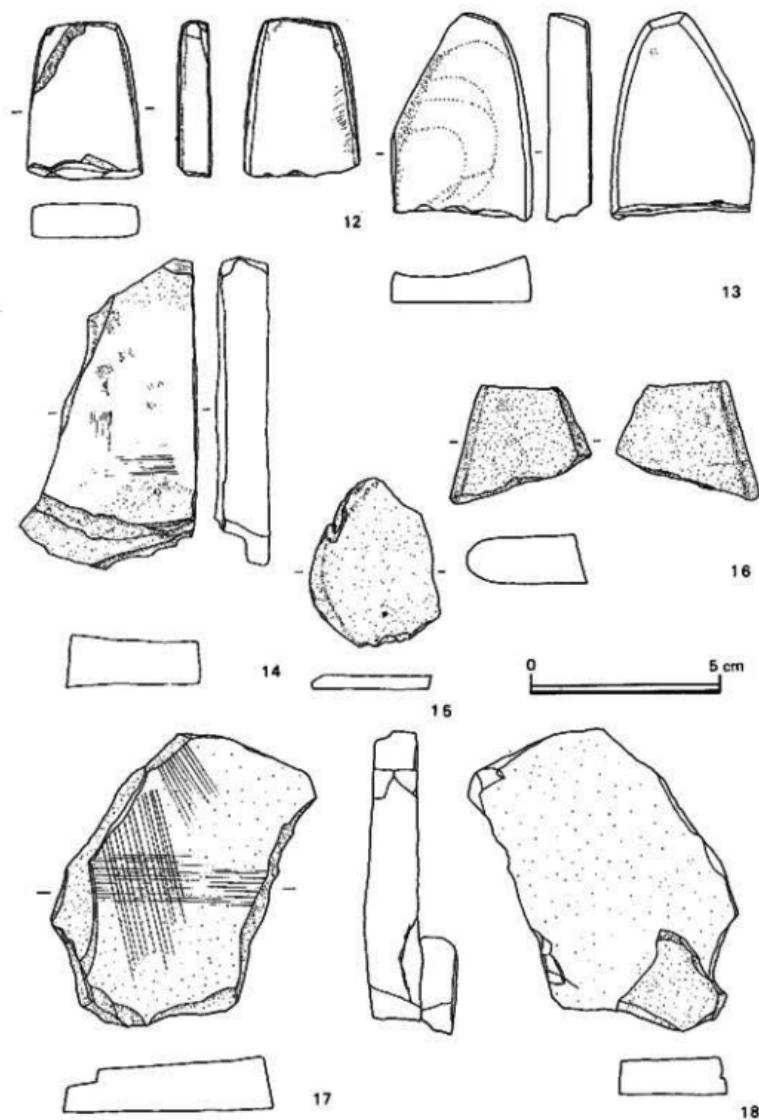
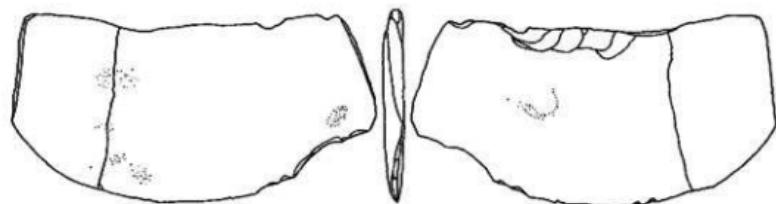


Fig. 23 出土石器実測図 ② (3分)

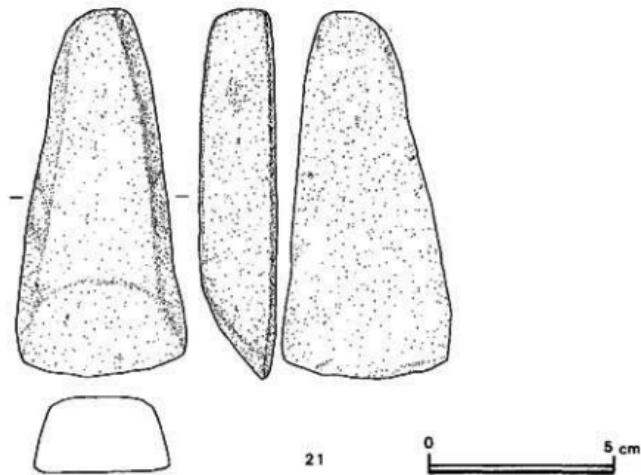


19



20

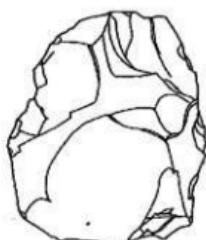
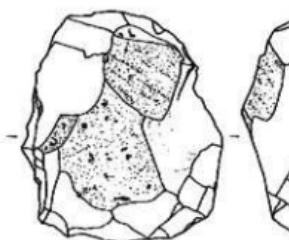
24



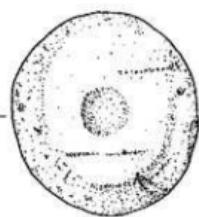
21

0 5 cm

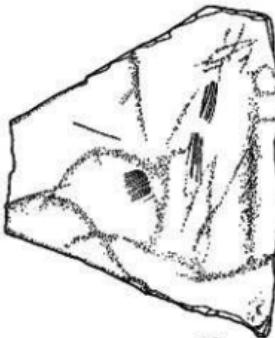
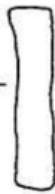
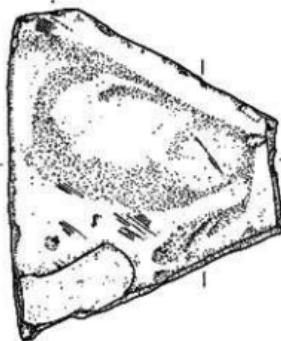
Fig. 24 出土石器実測図 ③ (3%)



11



22



23

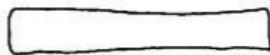


Fig. 25 出土石器実測図 ④ (3%) (22・23は1/4)

VII まとめ

本遺跡における時間的経過という縦の系列と遺跡の広がりという横の繋がりについては、今まで簡単ながら触れてきた。本項では横の繋がりについてもう少し詳しく検討してみたい。

○本遺跡の時期について

出土土器群の器種構成をみると、甕・壺・鉢・脚台付鉢・高环と日用容器である基本的な形態がセットになっている。これらは言うまでもなく農耕社会における煮沸・貯蔵・供献という生活の基本的な形態として捉えられる。とはいっても、これらは転用という形をとることによって他の目的を完遂させることもある。本遺跡において、その確証はないが他からの傍証により推察することは容易であるし、事実小栗C地点においてその例証を知る。また、これらの器種の数量的掌握も出土品のはほとんどが人為的破損を受けて細片化している今次の調査では無理であるが、やはり甕が主体で壺が次を占めると思われる。

編年作業は敢えて割愛したが、本遺跡の編年的構成はこれまで先学諸氏が報告してきたように中期前葉から後期後葉までを遺跡の主体と捉えて良いのではないだろうか。また、小栗C地点においては土師質上器の出土や中世の土壤墓の確認もあり、かなり長期に亘る丘陵の利用を窺わせる。

○生産背景について

小栗遺跡の眼前に広がる広大な耕地は、その殆んどを後世の干拓によって作りあげてきたもので、本遺跡が形成される頃の旧海岸線は標高3m以上5m以下とされる。^{注17}河川による自然堆積作用は本明川・半造川あるいはその支流である埋津川により形成された極く狭い範囲に限られてくる。これらが弥生時代の経済基盤たる水稻栽培の可耕地として取りあげられ、また、低湿地に突出した標高10~60m位の低丘陵間に挟まれた小谷がその背景に加担していく。周辺の同時期の遺跡をみると、農耕遺跡を除いて他は小谷に面する低丘陵上の西端に形成される傾向にある。これは何を意味するのだろうか。無作為に立地しているとは思えない。中期以降集落が大型化し、大規模な生産背景を作っていくことは各地の類例に共通するところで、本遺跡もその主体を中期に比定しており、同様の傾向にあったと捉えて良いと考えられる。とすれば、その巨大化した集落を丘陵上に求めるに同時に、その可耕地を埋津川流域とその支流である小ヶ倉川が流れる小谷に求めることができよう。巨大化した共同体を支えたための経済基盤は可能な限りの利用が計画されたであろう。この可耕地は対応する農耕遺跡とも重複していたであろうし、相互間に結びつきがあったと考へて良いだろう。

○集落について

これまで県教育委員会と諫早市教育委員会でそれぞれ1回ずつの調査を実施してきたが、いずれも埋葬関係遺構を検出したにすぎず住居址は未検出である。先述のとおり標高5mが旧海岸線とされると丘陵との間に低湿地や微高地が存在していく。標高10mのラインをみると丘陵標部を走り低湿地が9割以上見られなくなる。（農校遺跡は10m位に立地しており辛うじて微高地の先端部にあたる。）とすればその生産背景を考慮したとき、3～5mの標高が適当な高さとして浮揚していく。灌漑技術の進歩をも考慮し、その居住空間を低地に求めることも可能であるがやはり丘陵上に求める方がより妥当性があると考えられ、資料不足の現時点においては丘頂部に設定しておきたい。

○墓域について

前項との絡みもあるが、墓制についてのみ考えてみると、特定の地域が選定され埋葬される傾向をみると本丘陵も単に墓地として選定されていた可能性も捨て去ることはできない。とはいっても巨大化した共同体を維持していくためにはより拡大な可耕地が必要であったことからみて住居空間を丘陵上にあげた。埋葬空間もそこに併設されたものであると解釈しておきたい。埋葬形態も甕棺墓・箱式石棺墓・土墳墓と様々であり時期的差異もある。丘陵の総合利用という点から今後詳細な調査と資料の集積が解決してくれると思する。

註1 正林 譲（1972）「諫早市小川町所在の埋蔵文化財緊急発掘調査の概要」 長崎県教育委員会

秀島貞康（1983）『林ノ辻遺跡』 講談社文化財調査報告書 第4集 講談社教育委員会

2 高野晋司（1978）「小野古墳の調査」『長崎県埋蔵文化財調査集報I』 長崎県教育委員会 のP.47にその記載があり広島大学白井義彦氏の説とされるも出典不明。

PLATES



道路近景（中央の人が居るところが調査区、その先は諏訪市街地） S 47撮影



1 遺跡の説明



2 調査前の供養

2 図上



1 出土状況(石刀)

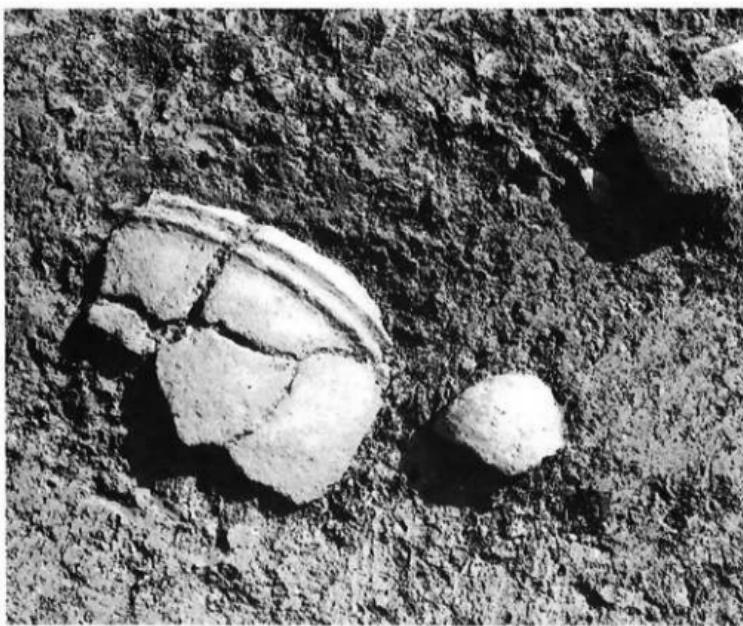




1 出土状況（碗）



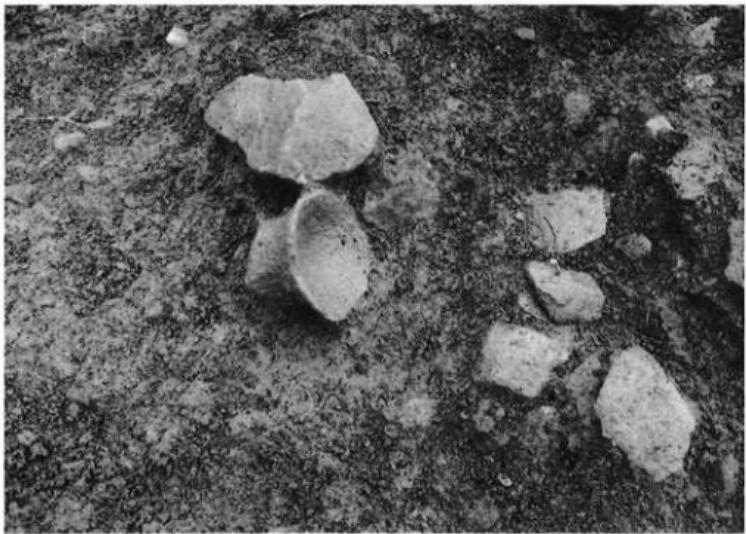
2 同 左（脚台）



3 同 上（腰）



1 出土状况（底部他）



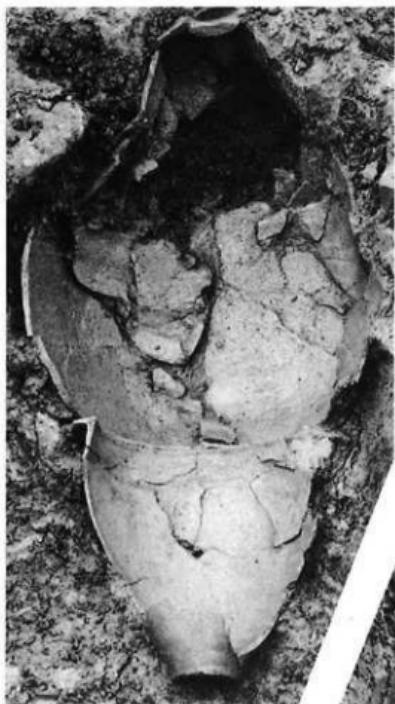
2 同 上



1 出土狀況（高坏他）



2 同 上



1 第1号甕棺出土状況



2 同上



1 第1号壺結合口部



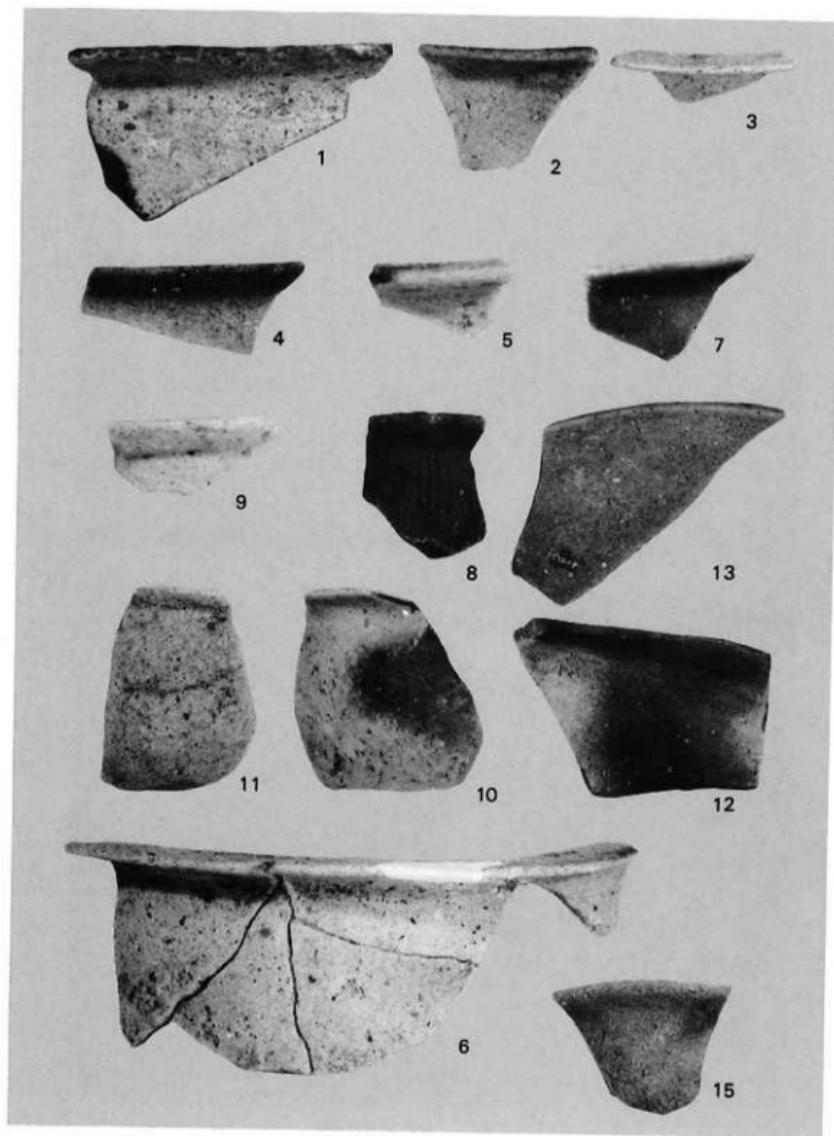
2 同 拡 大



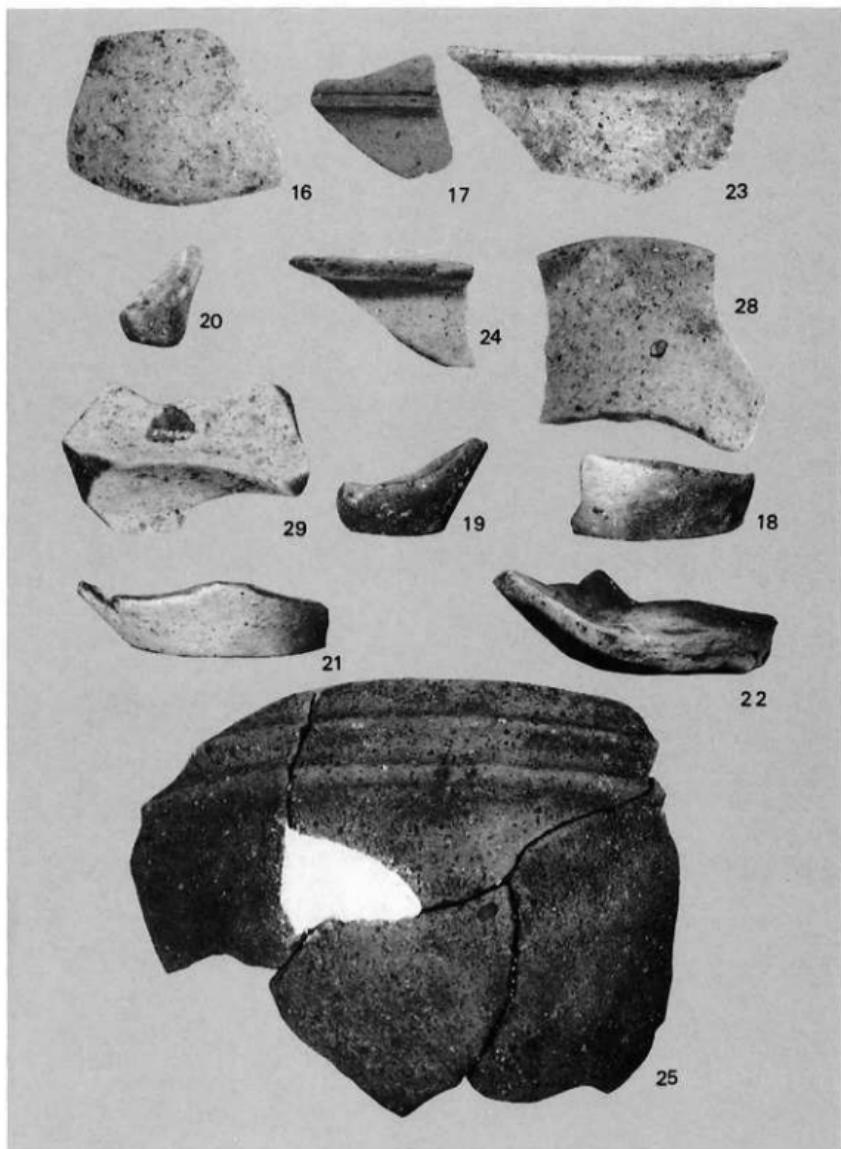
1 調査風景



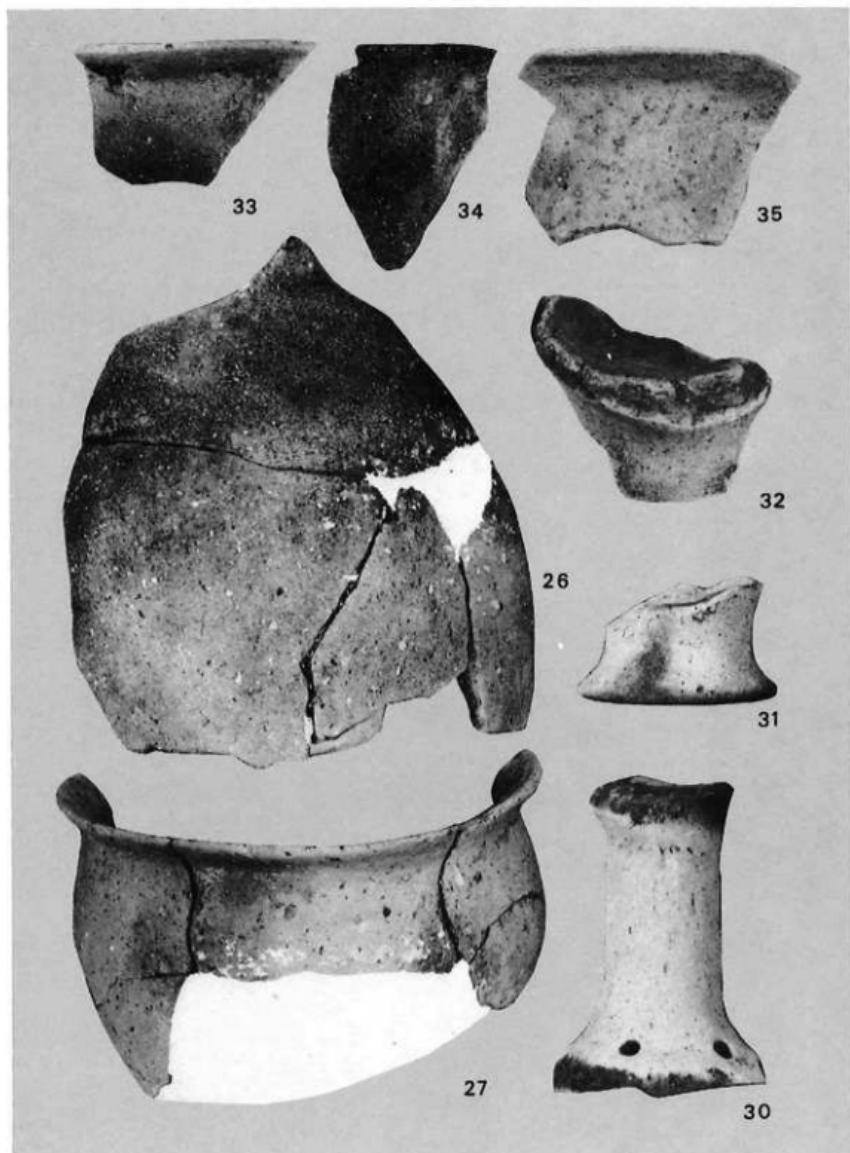
2 同上



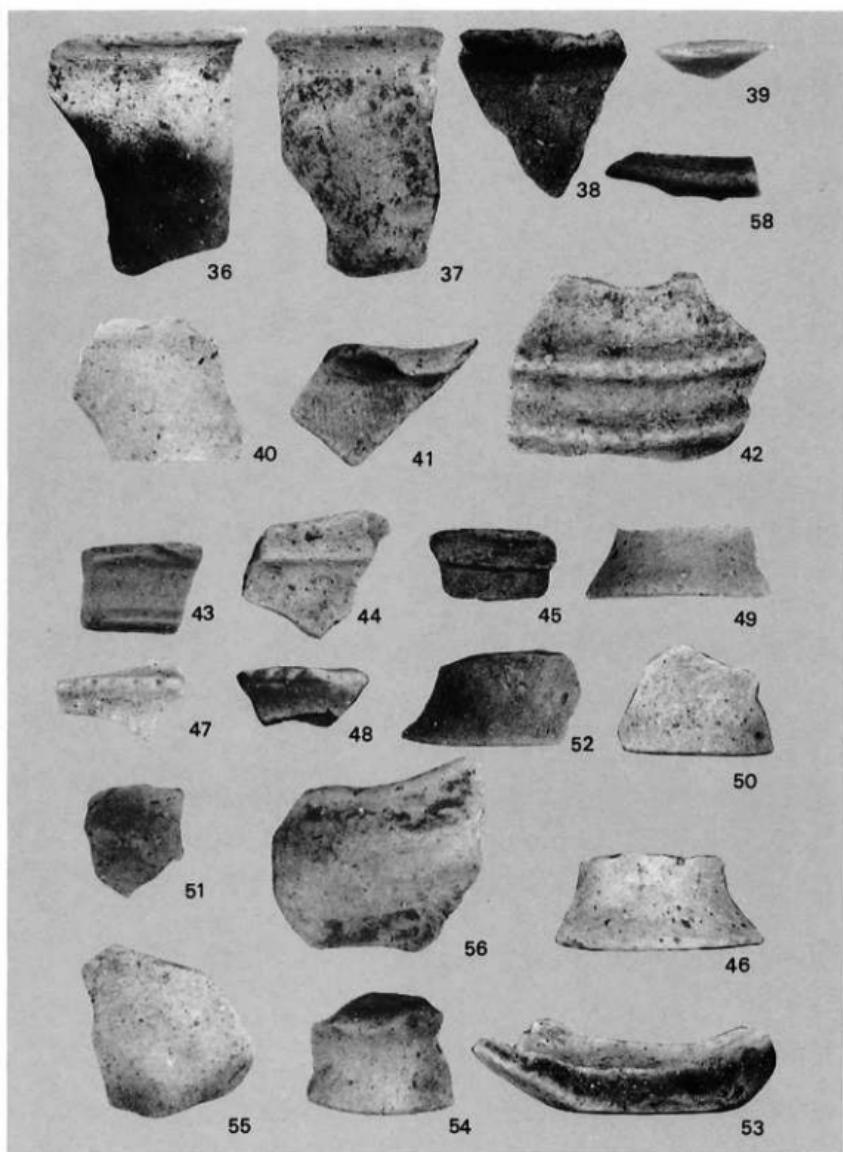
出土土器 ① (D-5区) 1/2



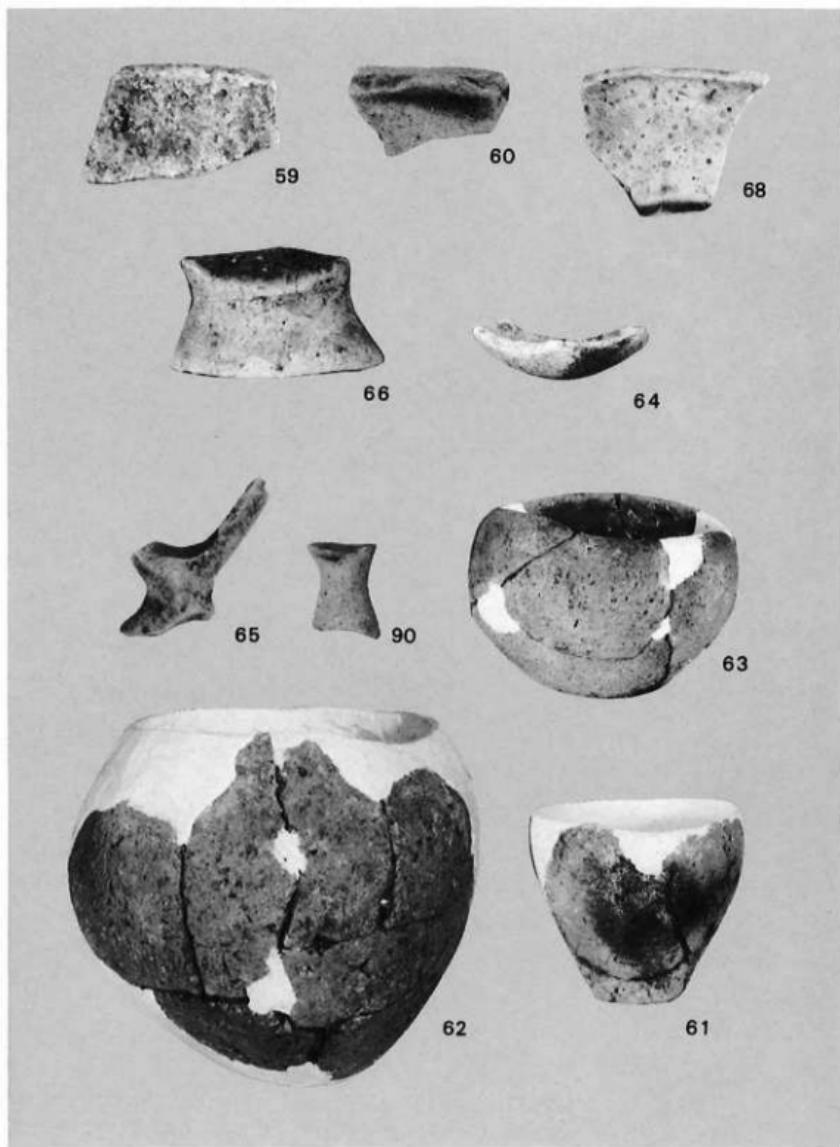
出土土器 ② (D-5区) 1/2



出土土器 ③ (D-5区) ½



出土土器 ④ (D—4区) 1/4



出土土器 ⑤ (D-4区) 1/2

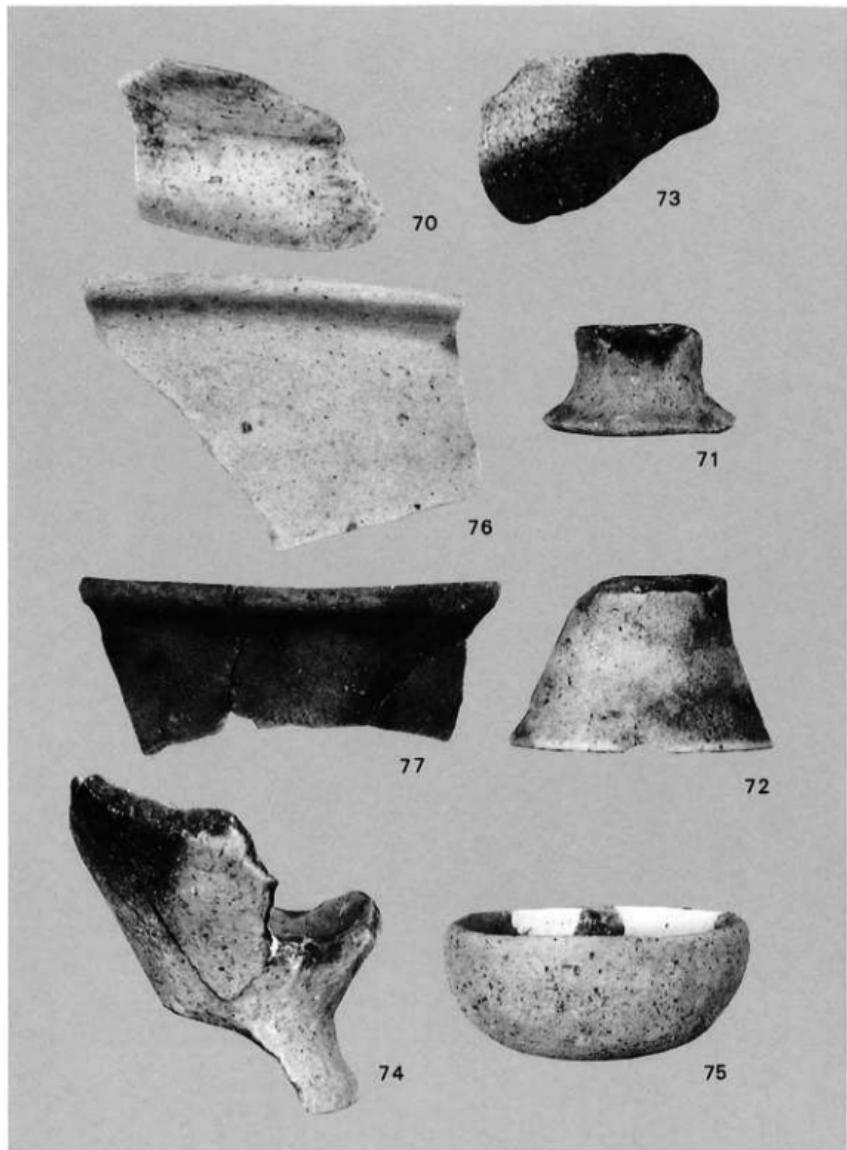


69



67

出土土器 ⑥ (D-4区) ½



出土土器 ⑦ (G-4区・G-5区・E-1区・E-2区) 1/2

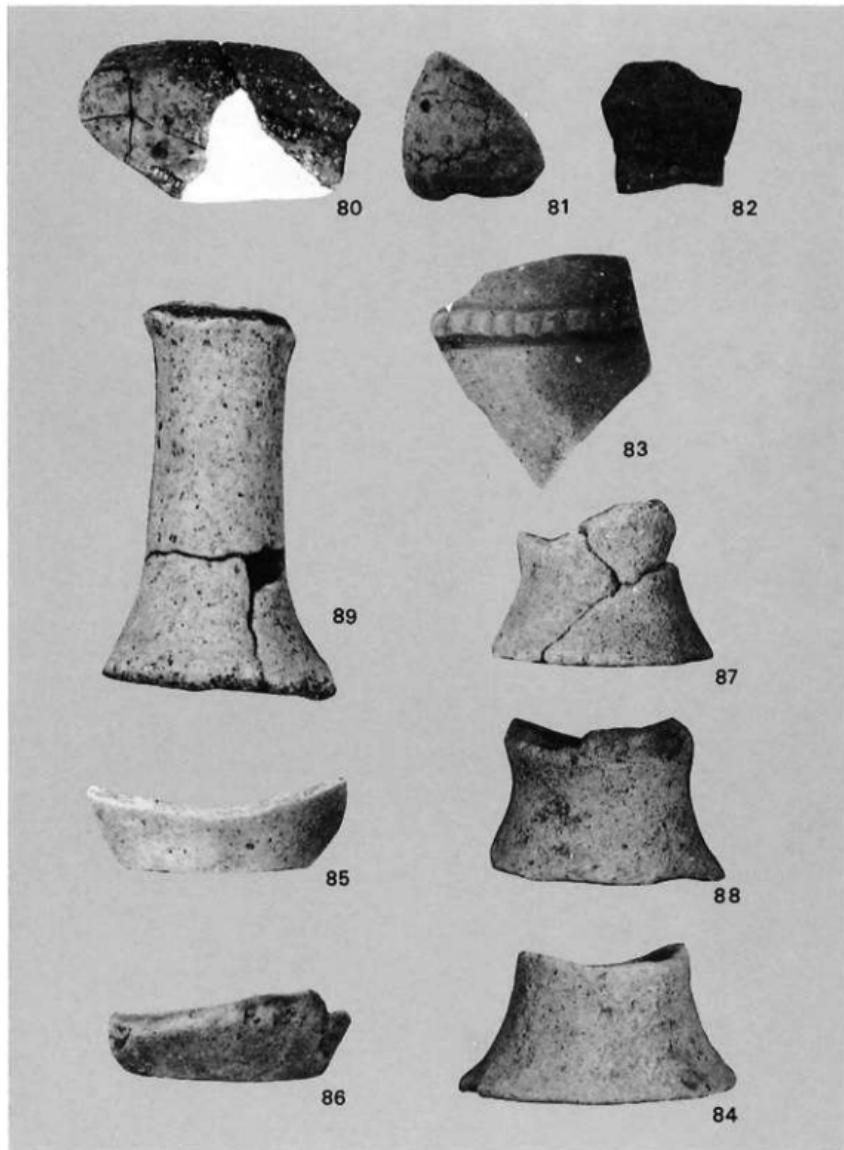


78

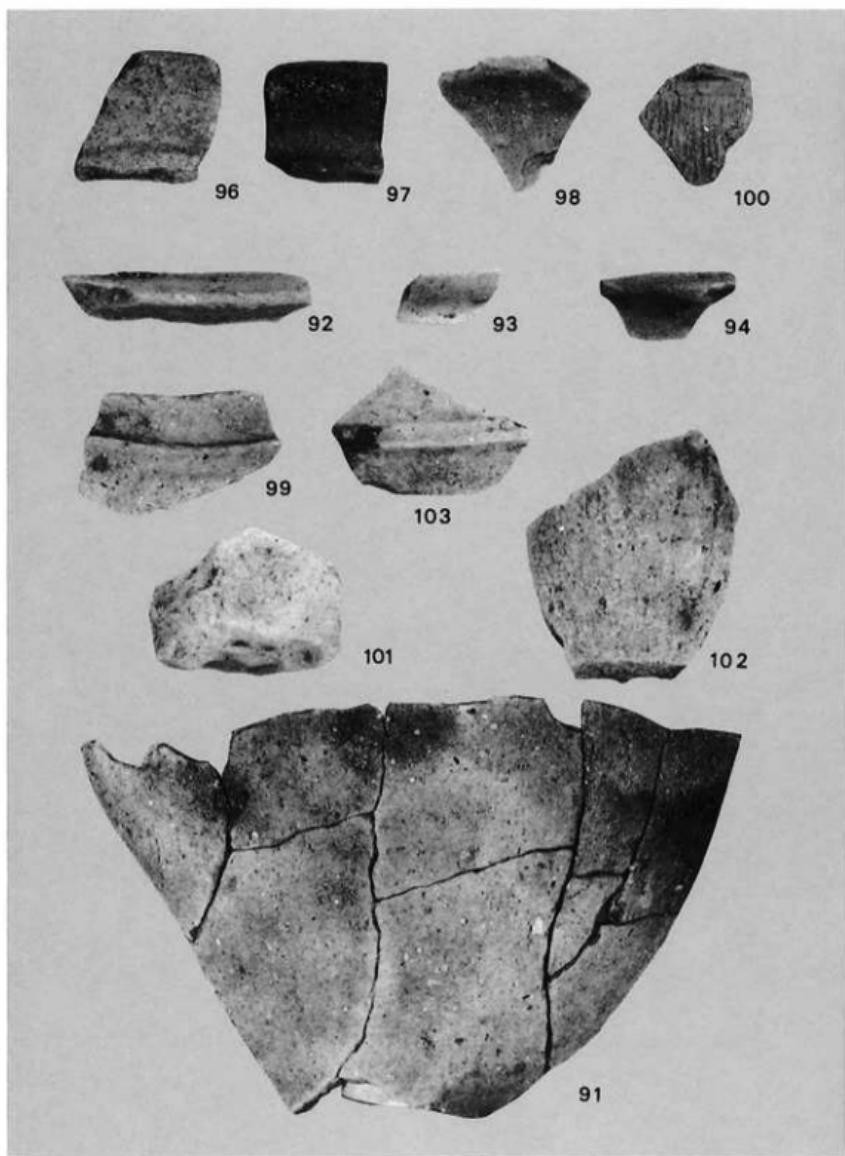


79

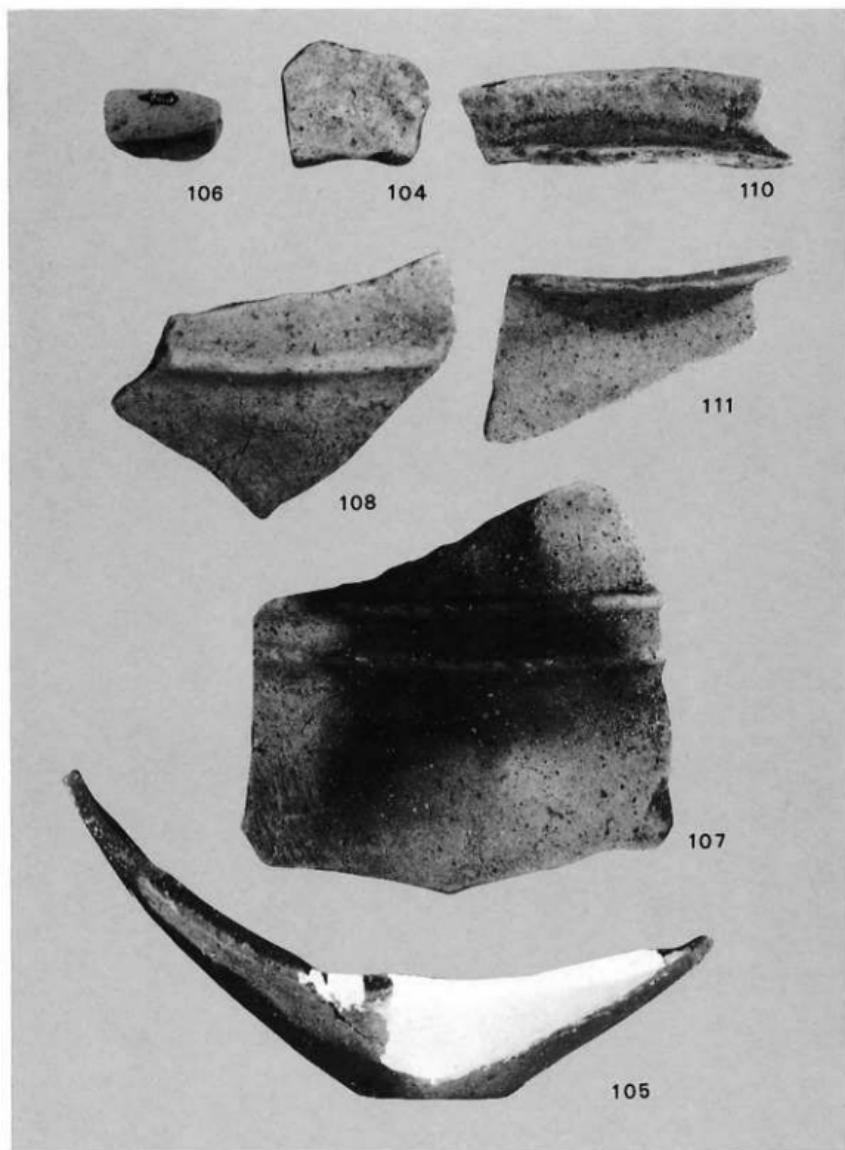
出土土器 ⑧ (G—2区) ½



出土土器 ⑨ (G-2区) ½



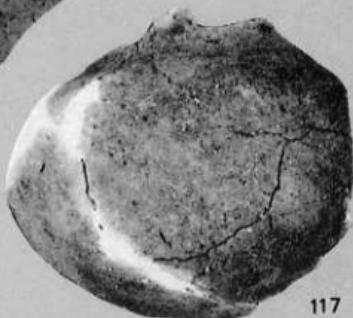
出土土器 ⑩ (G-2区・G-3区) 1/2



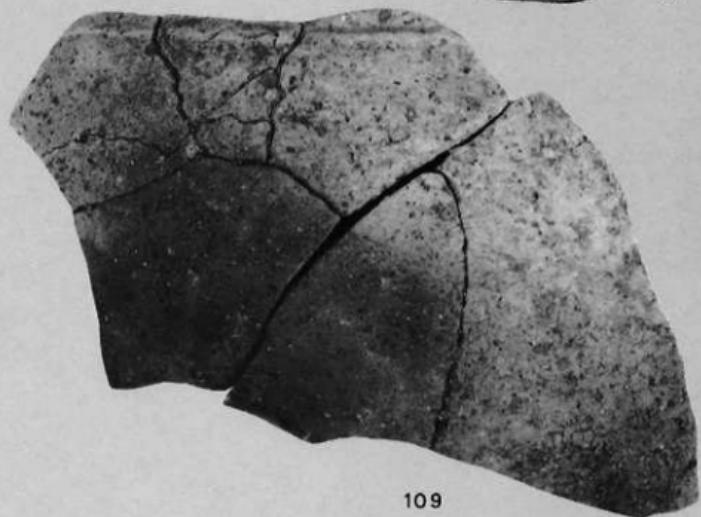
出土土器 ① (G-3区・H-2区) 1/2



113

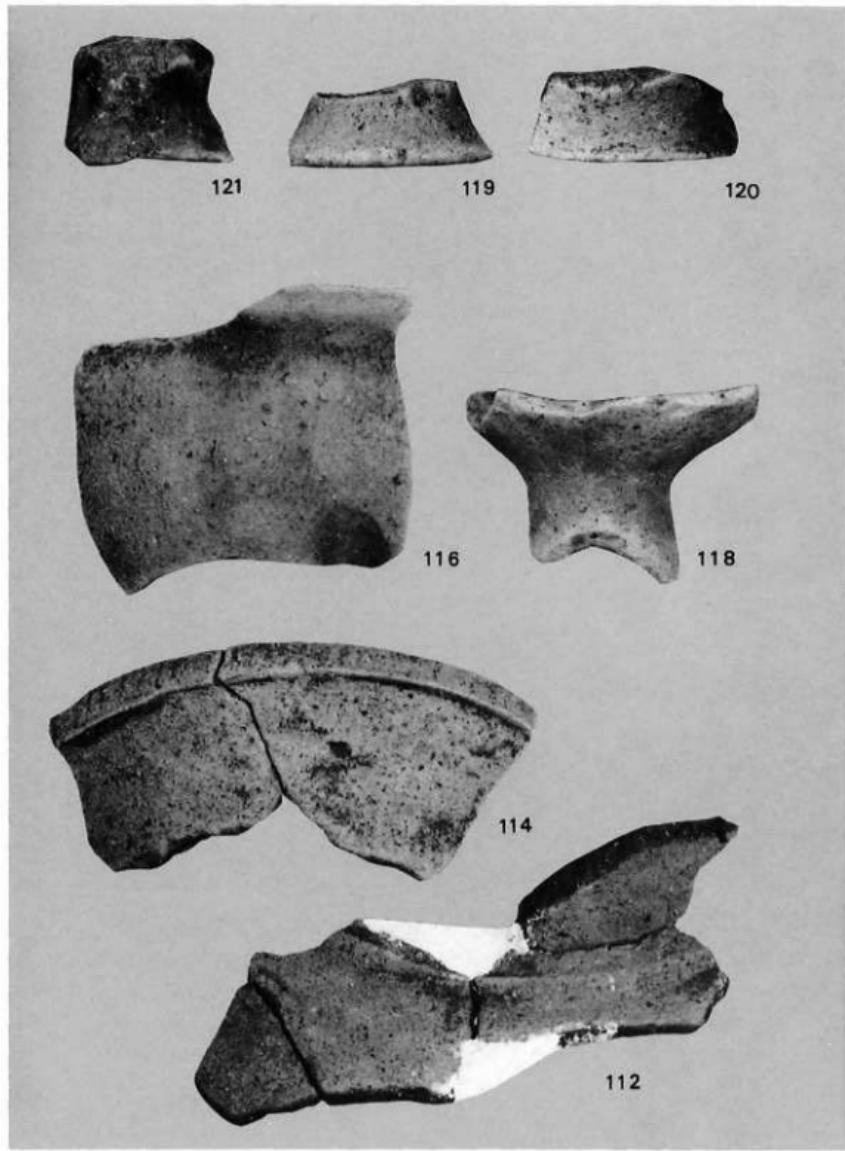


117

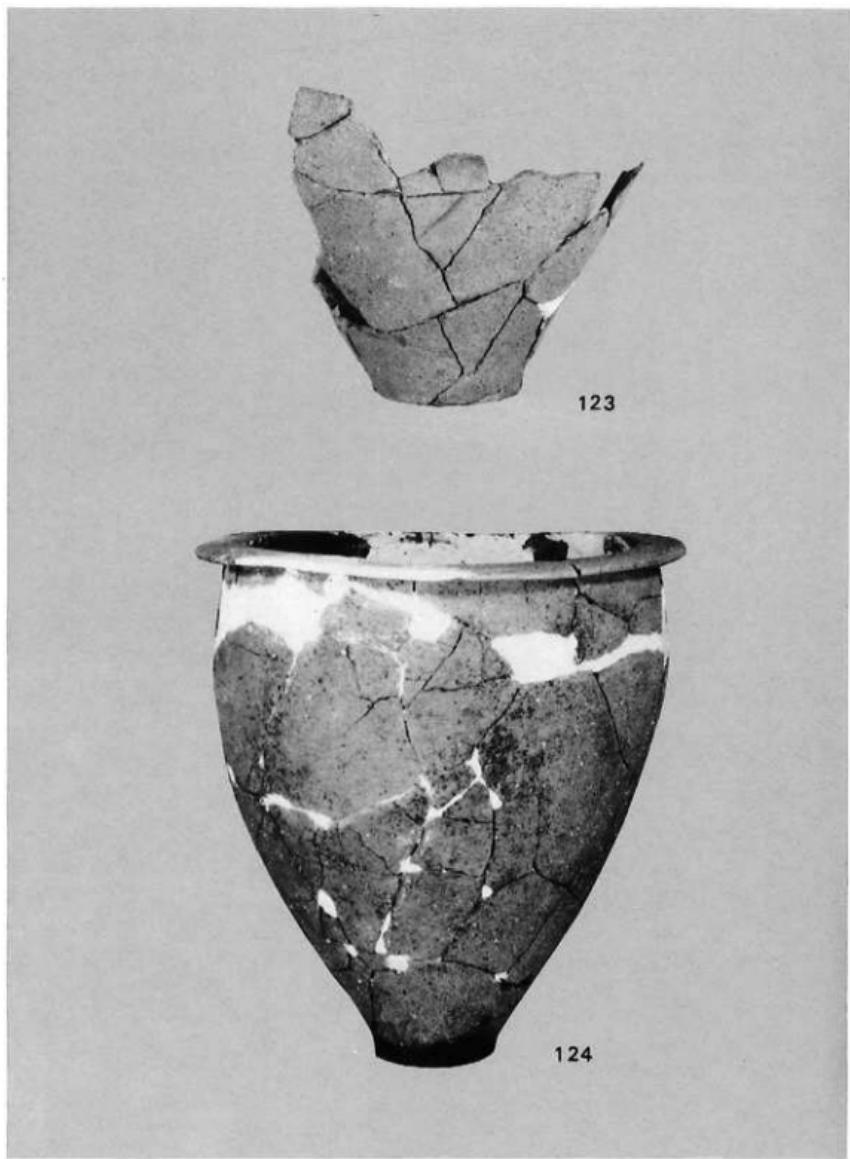


109

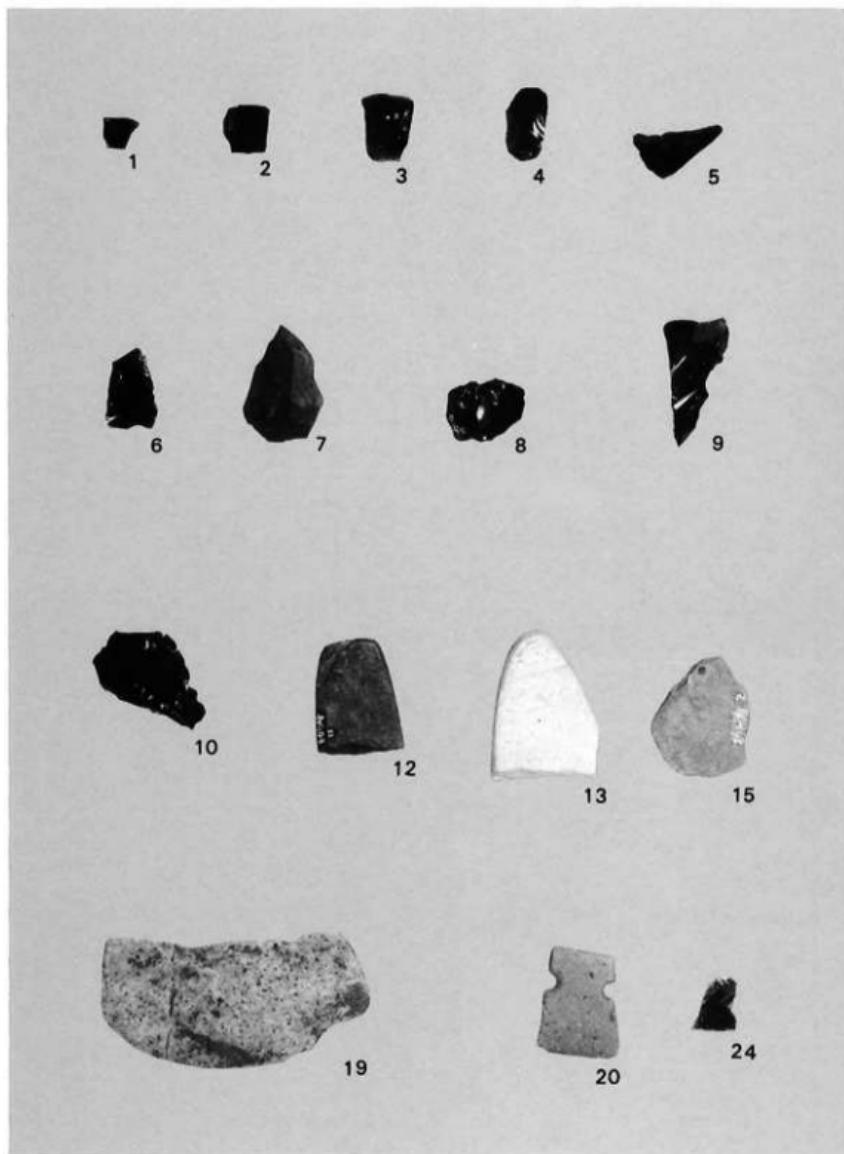
出土土器 ⑫ (H-2区) 1/2



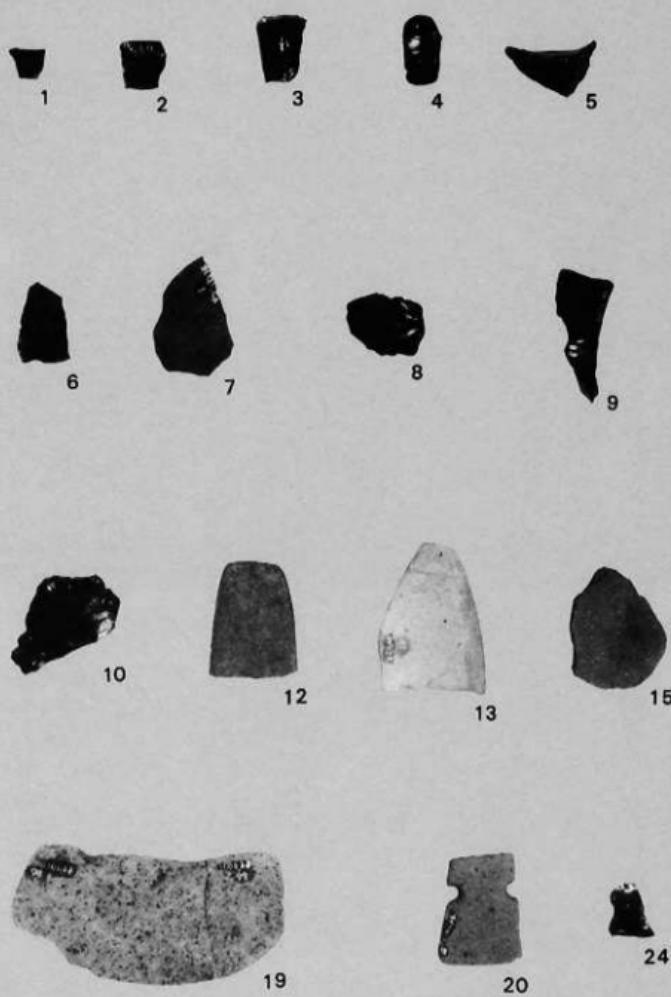
出土土器 ③ (H-2区・D-3区・D-1区) ½



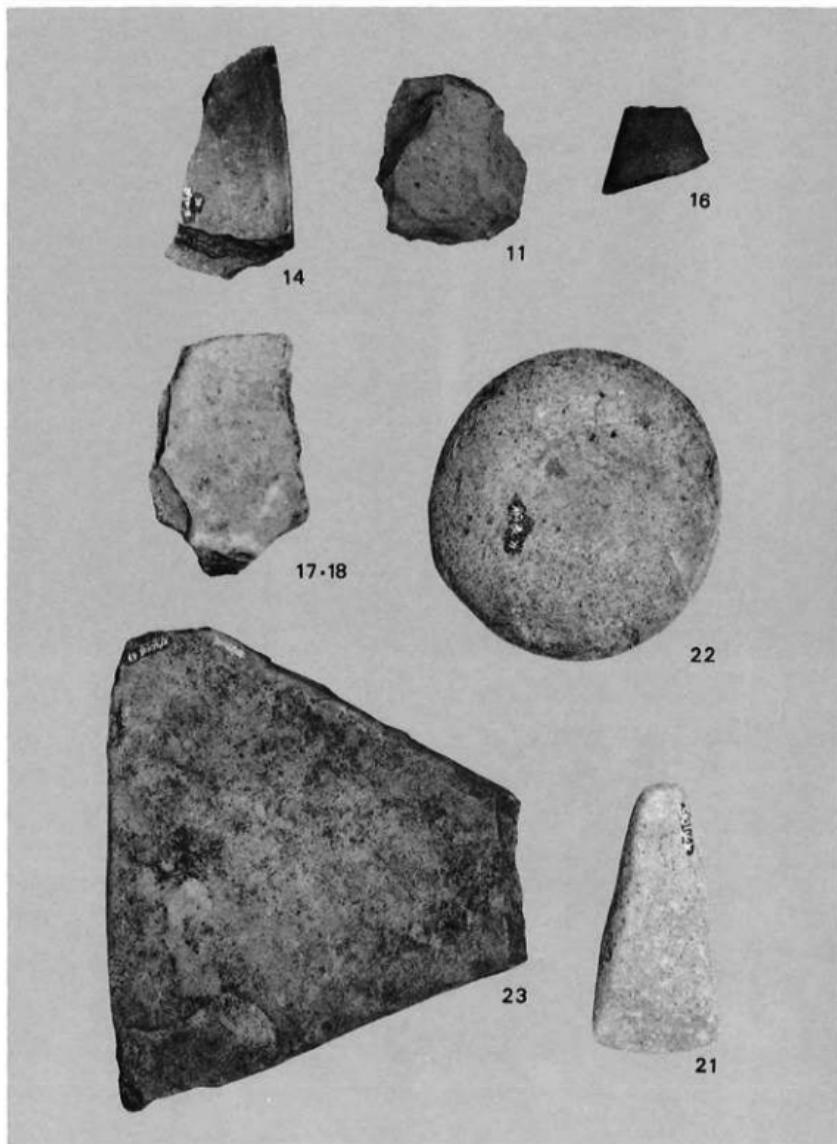
B-2区出土焼物 (14)



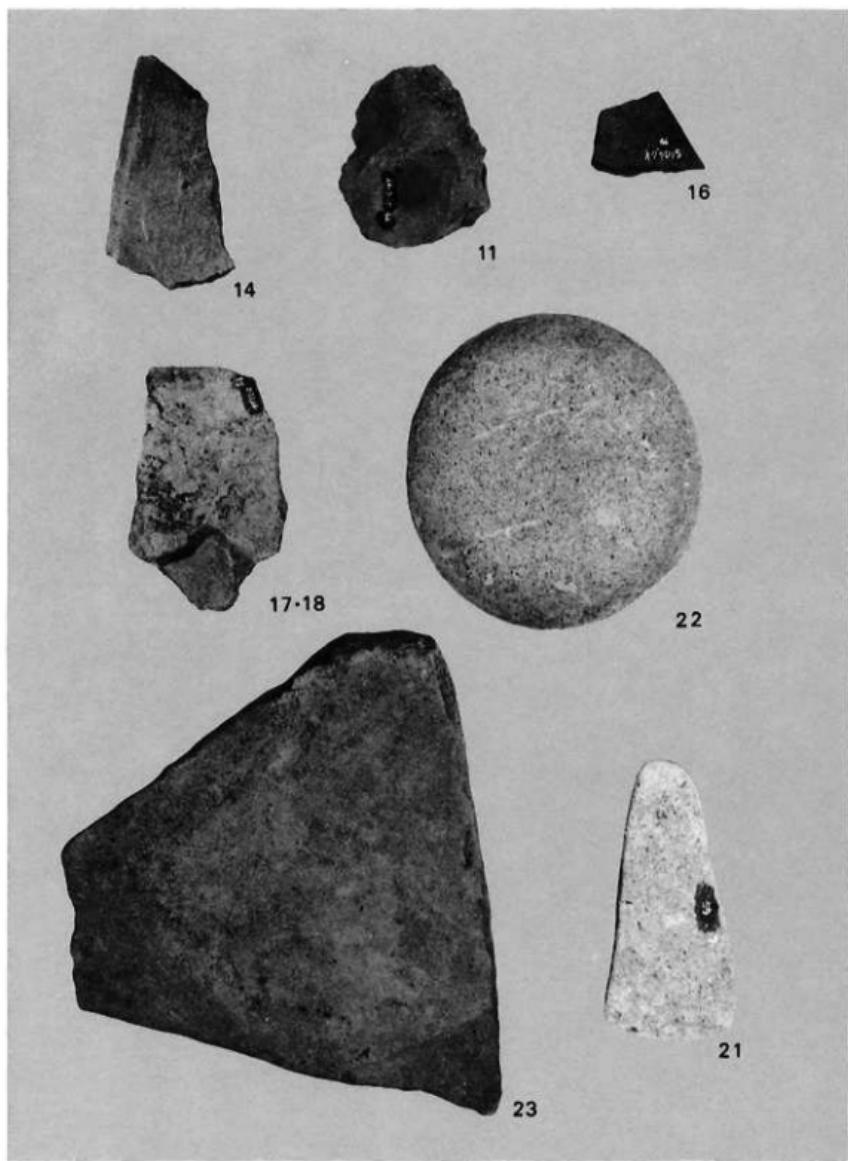
出土石器 ① 表 (1/2)



出土石器 ② 裏 (少)



出土土器 ③ 表 (1/2)



出土石器 ④ 裏 (3)

II 帆 崎 遺 跡

——北高來郡小長井町所在——

例　　言

1. 本報告書は、昭和53年に実施した帆崎遺跡（北高来郡小長井町所在）の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、長崎県文化課が主体となり、田川　肇（文化財保護主事・現主任文化財保護主事）・森内敏和（旧姓：平野　文化財調査員・現外海町歴史民俗資料館学芸員）が担当した。
3. 調査は、小長井町および町教育委員会の協力を得て実施した。また、調査担当者の両名は九州横断自動車道関係の緊急発掘調査を実施中であった関係で、日本道路公団長崎工事事務所の御配慮をも賜った。
4. 調査中の写真撮影は平野が担当した。その他は田川による。
5. 出土した甕棺は大形で復原作業に困難を極め、完全復原が出来なかっただため、図版中の写真是合成してある。奇異な感じを受けるのはそのためである。御容赦願いたい。
6. 本書の執筆は出川が行った。トレスやその他の作業には、広川　裕子（整理補助員）・宮崎美保（同）の協力を得た。
7. 出土甕棺は現在県文化課で保管している。

本文目次

例 言	頁
I 小長井町の自然環境.....	87
II 小長井町内の遺跡	88
III 調査	91
1. 調査に至る経緯.....	91
2. 遺跡の立地環境.....	93
3. 調査の概要.....	93
4. 瓢棺.....	93
5. 墓域.....	95
IVまとめ.....	95

図 版 目 次

- PL. 1 遺跡遠望（西より）
- PL. 2 1 遺跡近影（南より）
2 発見時の甕棺
- PL. 3 1 出土状況（東より）
2 同上（南より）
- PL. 4 1 出土状況（北より）
2 実測終了後（同上）
- PL. 5 1 出土状況（南より）
2 墓域（同上）
- PL. 6 1 墓域（東より）
2 同上（北より）
- PL. 7 1 箱式石棺の木口
2 法面に露出している箱式石棺
- PL. 8 瓢（復原）
- PL. 9 実測風景

挿 図 目 次

- Fig. 1 小長井町位置概念図
- Fig. 2 小長井町遺跡地図
- Fig. 3 遺跡周辺地形図
- Fig. 4 甕棺出土状況図（少）
- Fig. 5 甕棺実測図（少）

表 目 次

- Tab. 1 小長井町遺跡地名表

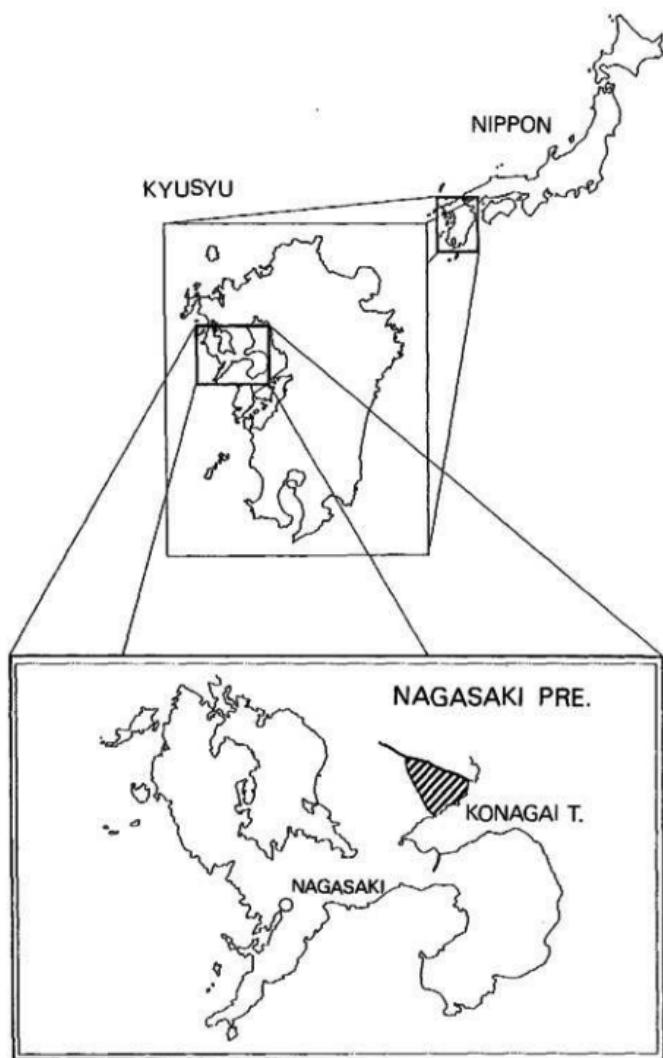


Fig. 1 小長井町位置概念図

I 小長井町の自然環境

小長井町は、行政的に北高来郡に属し、佐賀県と隣接する我県の東端に位置する。自然に恵まれた人口約^{註1}7,400人の農業・林業・石材業を主体とした町である。行政面積は^{註2}30.09km²を占めるが、その殆んどが山林であり、耕地面積は僅か^{註3}675haと少ない。

多良岳火山を後背し、眼前に広がる有明海を挟んで島原半島と対峙する。その遠望は、火山特有のなだらかな樹野を雄大に広げた素晴らしい景観を呈する。

島原半島の中央部に位置する雲仙岳もこの多良岳とともに火山であるが、雲仙岳は休火山、多良岳は死火山である。多良岳火山は、標高1,075.5mの経ヶ岳を主峰とし、五家原岳(1,057.8m)・多良岳(982.7m)などの高峰で形成されており、その生成は雲仙岳火山より古く、基盤は古第三紀層と玄武岩とされている。これを安山岩類や火山碎屑岩が覆って広く分布する。連峰部頂部附近は、多良岳火山最後の噴出物とされる角閃石安山岩が分布している。^{註4}

一方、町内を貫流する二級河川には、長里川・小川内川・今里川・小深井川・船津川の5流があり、それぞれの流域面積の合計は^{註5}28.4km²と広い。その泉源はいずれも多良山塊中腹域にまで遡ることができる。これらの湧水点は、高燥地帯とよばれる高部平坦地に自然的条件により点在し、遺跡形成の重大な要因のひとつになっている。その他の地域においても、遺跡形成の自然的条件因子は作用し、中部域の扇状地形の末端部や、海岸線に近い平地においても同様の傾向をみ、その集中度が高い。

年間降雨量も平均約^{註6}2,000mmと多く、また、年間平均気温も^{註7}16°Cと暖かく、樹木の生育に適しているところから杉・檜等の造林地が多い。

多良山系の植物相に眼をやると、見るべきものが多く、ツクシシャクナゲやセンダイソウなどの珍らしい植物が群生し、これらの群落は天然記念物として、それぞれに国と県の指定を受けて保護されている。植物相の発達は、当然の理として禽獣類の良い繁殖条件となり、タヌキ・キツネ・イタチ等の小動物から鳥類・爬虫類・昆虫等多くの種類の捷息が確認されている。

註1 長崎県統計協会の昭和58年5月1日の資料による。

2 同上

3 同上

4 石川直衛(1971)「多良岳」「長崎県の地学」所収 長崎県地学会

5 小長井町郷土誌(1976) 小長井町

6 同上

7 荒生公雄(1981)「温暖な海洋性気候」「長崎県の歴史と風土」創士社

8 長崎県教育委員会(1980)「長崎県の文化財」

II 小長井町内の遺跡

町内に所在する遺跡を巡観するときには、前項でも触れたように多良山塊の自然地形の影響をかなり強く受けていることを忘れてはならない。

遺跡のいくつかは昭和の初期頃から既に知られてきたところであるが、分布調査等の実施によりその数は相対的に増加の一途をたどっている。この現象は、人為的大規模開発行為が比較的少なく、しかもそれらが国道207号線沿いに進められてきたことにも起因しよう。とはいえる近年それらの区域から脱却した個人住宅の建築、農道の整備等により、次第に山手側にのびてきている事実も見逃せない。遺跡が蚕食状態で滅失してしまうケースも予想される。

高部平坦地には湧水点が点散し、その周囲には各時期を通じて遺跡が形成されている。遺跡地図をみてまず眼をひくのが、町中央部に位置する田原溜池周辺であろう。現在9箇所の遺跡が確認されている。縄文時代の散布地として、小次郎遺跡(43)・大宮良遺跡(6)・弥次郎遺跡(11)・柳谷遺跡(18)等列挙できる。大宮良遺跡は弥生時代との複合遺跡で、粘板岩製の磨製石剣の出土もある。

この田原地区よりさらに高所に、先土器時代の台形石器や台形様石器が出土した山茶花遺跡(1)が存在する。また、前出の弥次郎遺跡からは三棱尖頭器・剝片尖頭器の出土を見る。いずれも標高200m~400mの高燥地である。

標高100m前後の丘陵端に一群の遺跡をみることができる。箱式石棺や甕棺等の埋葬構造を併せもつ下蔭平A(21)・B(20)遺跡や今回調査を実施した帆崎遺跡(32)など弥生時代の遺跡群である。これらは、その性格上かなり広範囲な分布面積をもつ。

有明海に臨む平地や丘陵の尖端部には古墳時代の遺跡が点在する。有明海沿岸域の古墳文化の影響を受け、立派な石室をもった円墳や線刻画(文)が描かれた装飾古墳の存在が挙げられる。〔長戸古墳(29)・丸尾古墳(31)・大峰古墳(42)等〕

以上概観したとおり、これらの遺跡は、大略古い時期の遺跡が標高の高い位置にあり、時代が下るにつれて低標高位に形成されるという傾向をみせる。その形成要因として、地形的背景はもとより、それと相俟っての生産背景をその重要な因子のひとつに枚挙することは決して奇かでない。

註1 津田繁二(1940)「我が長崎県の先史時代及び原始時代の遺跡・遺物の概略に就て」

長崎談叢 第26輯

2 小長井町郷土誌(1976) 小長井町

3 同 上

4 同 上

5 田川 勲(1982)「長戸古墳・丸尾古墳」長崎県埋蔵文化財調査集報V 長崎県教育委員会

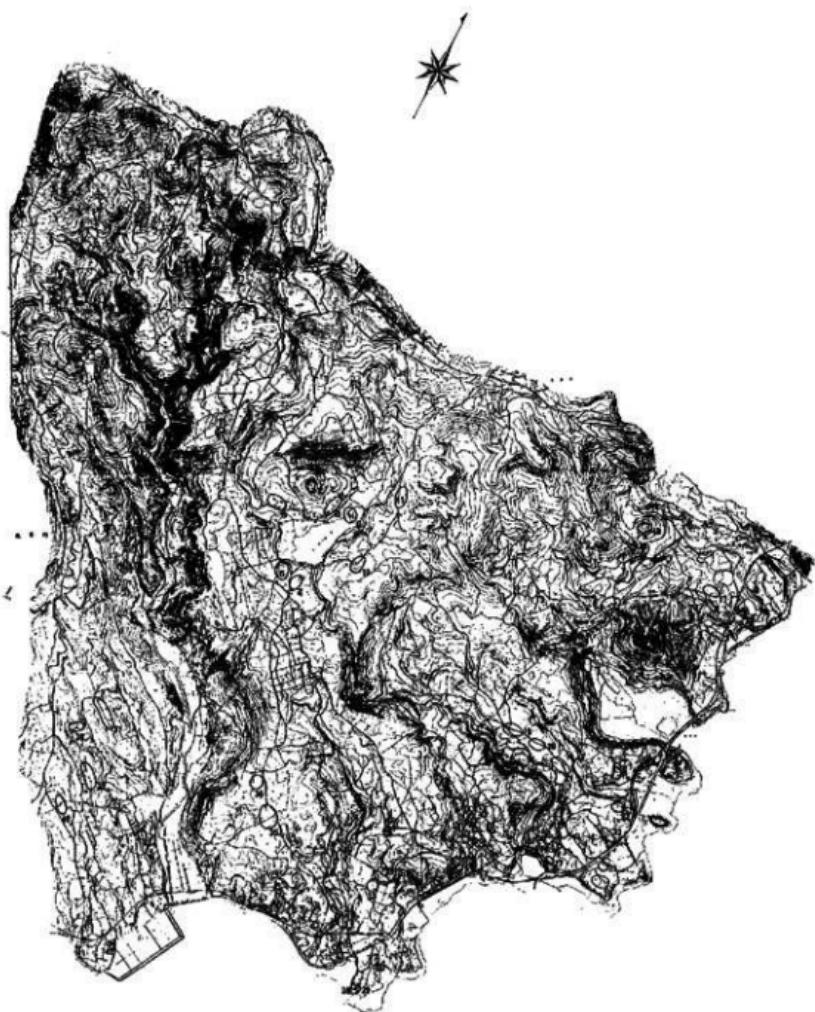


Fig. 2 小長井町遺跡地図

番号	名 称	種 別	時 代	所 在 地
1	山茶花池遺跡	散 布 地	先・繩	山茶花
2	井崎橋遺跡	タ	繩 文	古場名井崎橋
3	高平第1~3洞穴	洞 穴	先土器	川内名高平(称念寺)
4	向平A遺跡	散 布 地	繩 文	田原名向平
5	木妻木遺跡	タ	タ	木妻木
6	大宮良遺跡	タ	タ	大宮良
7	田原城	山 城	中 世	タ
8	城山遺跡	散 布 地	繩 文	城山
9	田原池遺跡	タ	タ	タ
10	向平C遺跡	タ	タ	向平
11	小二郎遺跡	タ	タ	小二郎
12	横ミ川遺跡	タ	タ	黒仁田名横ミ川
13	黒仁田遺跡	タ	タ	遠竹名黒仁田
14	遠江守の墓	古 墓	中 世	タ字岩宗
15	権現岳城	山 城	タ	タ字権現平
16	南平古墓	古 墓	タ	タ南平
17	遠竹名遺跡	散 布 地	繩 文	朝日坂
18	柳谷遺跡	タ	タ	タ柳谷
19	長長遺跡	タ	古 墳	井崎名長タ
20	下藤平B遺跡	墓 地	弥 生	タ下藤平
21	下藤平A遺跡	タ	タ	タ下藤平
22	下藤平遺跡	散 布 地	繩 文	タ下藤平
23	井崎遺跡	タ	タ	タ風呂ノ子
24	竹ノ崎古墳	古 墳	古 墳	タ竹ノ崎
25	城山古墳	タ	タ	タ
26	竹ノ崎遺跡	散 布 地	繩 文	タ竹ノ崎
27	井崎支石墓	支 石 墓	弥 生	タ
28	帆崎古墳	古 墳	古 墳	小川浦名長戸鬼塚
29	長戸古墳	タ	タ	タ鬼塚
30	帆崎遺跡	散 布 地	繩 文	牧名帆崎
31	丸尾古墳	古 墳	古 墳	タ丸尾
32	帆崎遺跡	散 布 地	繩 文	新田原名帆崎
33	帆崎石棺墓	墓 地	弥・古	タ帆崎
34	堤ノ頭遺跡	散 布 地	繩 文	牧名堤ノ頭
35	白石谷遺跡	タ	タ	タ白石谷
36	石測遺跡	タ	タ	打越名石測
37	中尾遺跡	タ	タ	大嶽名中尾
38	小実田井遺跡	タ	タ	タ小実田井
39	大堀遺跡	タ	タ	タ大堀
40	金比羅古墳	古 墳	古 墳	打越名牧丸尾
41	田代石棺墓	墓 地	弥 生	大峰名田代
42	大峰古墳	古 墳	古 墳	タ尾崎

Tab. 1 小長井町遺跡地名表

III 調 査

1 調査に至る経緯

諫早から国道207号線で高米町を経由して小長井町に至る。美麗な容姿を誇る小長井大橋の500m程手前、国道傍に町役場の庁舎が建っている。そのすぐ脇を多良岳に向って登る道路がある。県道183号線（田原線）で終点は「聖母の騎士園・みさかえの園」である。

その県道に南から取り付くように、小深井川の左岸に沿って、あるいは交叉し、あるいは右岸を走る農道がある。昭和53年に新設された農免農道である。

昭和53年12月11日（月） 小長井町助役・石丸一喜氏より、「農免農道船川地区工事現場から土器や石器が出上している。更に、切り通し面には甕棺が半分残存している。」の報を受けた県文化課は、早速県の担当機関である耕地課と直接の工事窓口である諫早市木口部事務所と保存について協議を重ねるとともに、当時諫早市貝津町で九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査を実施していた田川・平野の両名を急招派遣し、事後処理にあたらせることとした。

同年12月14日（木） 両調査員は現地に赴き視察した結果 ①農道本線（1.6km）は既に土工事が完了している。②本道部の包含層も壊滅しているところから、切り通し面に露出残存する大形甕棺1基のみを今次の調査の対象とすることとした。同時に、附近の分布調査を実施し、甕棺発見場所から西へ約100mの同農免農道本線内切り通し面に、損壊を受け木口部を露出した箱式石棺1基を確認した。法面中の高さ約2.5m位の高位位置に木口部を覗せており、どの程度破壊されているかは不明であるが、擁壁工事の計画もなく、触らずにそのまま残すことが可能であるし、高所のため調査に危険があるとのことで、現状のままで保存することとした。（盜掘されたり悪戯されたりする恐れはあったが…。）昭和60年2月2日、本報告書執筆に際し、再度現地を訪れて、当時の姿そのままであることを確認した。（PL. 7）参照

関係者一同現地で協議の結果、調査期間を2日間とし、とり敢えず図面・写真が撮れるような状態にして一応帰府した。

○昭和53年12月27日付、53耕第756号で遺跡発見届が県知事名で提出される。

○昭和54年1月20日付、54教文第6号で文化庁に進達する。

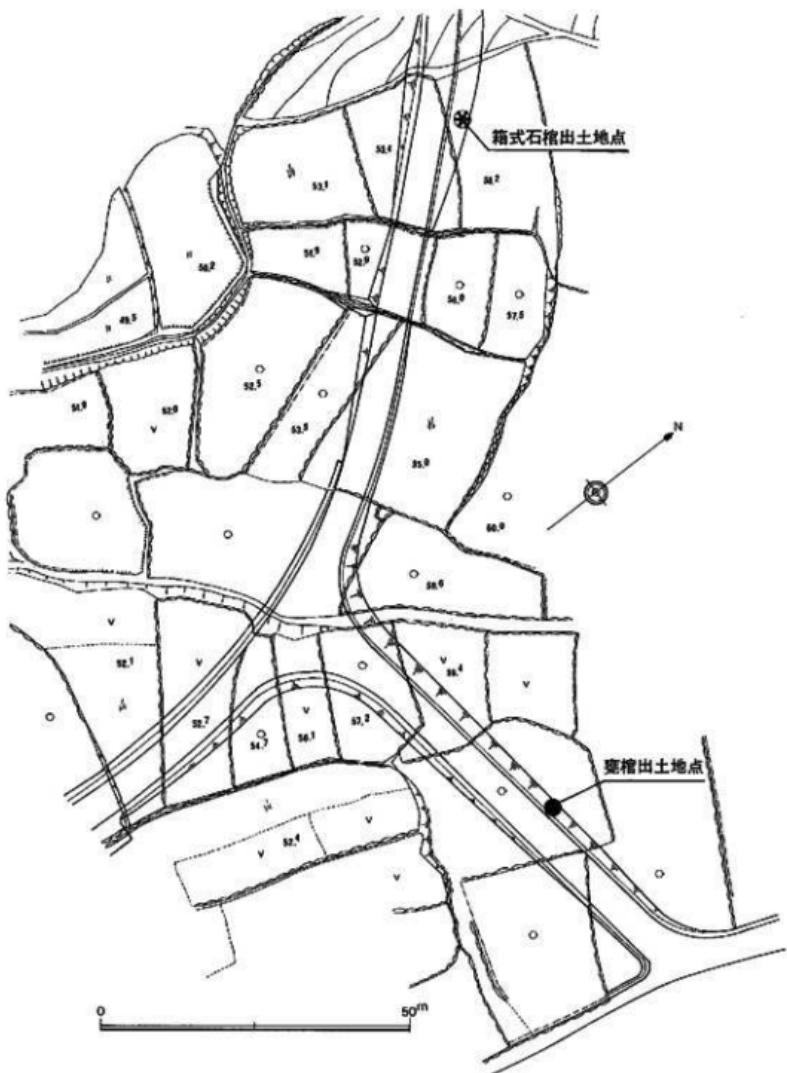


Fig. 3 遺跡周辺地形図

2 遺跡の立地環境

多良山系から有明海に向ってのびた低平な丘陵上の標高約50～60mくらいに遺跡は立地している。丘陵のすぐ西を小深井川が貫流して帆崎港に注ぐ。延長2,200mの短かい川であるが、流域面積は3.9km²ありそれ相応の開析作用は行っており、随所に谷部や小さいながらも扇状地等の侵食・堆積作用の片鱗をみせる。これらは帆崎遺跡の形成に一役荷っていると同時に、開析された丘陵は良好な包含状況を推察させる。

丘陵の先端部には、先年集報Ⅴで報告した県下でも数例しか類例をみない線刻画（文）を有した長戸古墳が在るし、小深井川が流入する帆崎港の右岸丘陵上には同種の丸尾古墳が在る。

眼を西に転すれば、勝町高来町との町境に並行して町内隨一の長里川（延長5,260m、流域面積10.8km²）が大きく開析して丘陵を作りて有明海に注いでいる。小深井川と並流しており、相互間の距離は約1.5kmである。比較的大きな堆積作用をもち、町内でも有数の扇状地形を作出している。このことは、当時の社会的、生産的背景の強力な一因となっていたといえよう。

3 調査の概要

壺棺の出土現場は、前述のとおり切り通し法面中位にあり、口縁部から胴部にかけての上半分が損壊を受け、合口壺棺とした場合は下妻が完全に破壊され除去された状態であると見受けられた。まず、現状の写真撮影から開始した。（PL. 2-1）

清掃後の観察によれば損失した部分は、当初予想したとおり口縁部および胴部の約程度で、半分以下は土圧による破損で、その破片は器内に残存していることが判明した。（Fig. 4, PL. 3・4・5）

調査2日目。実測杭設置後、実測開始。器高約120cm、最大幅約80cmくらいある大形の壺で、方位を北西～東南へとり、僅かに東南に傾斜している。

上層の堆積状況は、軟質砂岩を基盤にしてその上に暗褐色粘質土層があり、さらにその上に表土層がのる単純な層序で、遺物包含層と考えられるその暗褐色粘質土層から基盤へと掘り込んで埋納してあった。保存状態は比較的良好であった。副葬品はない。

疋食抜きで頑張り、午後3時30分頃墓壠の掘り方の写真撮影で調査をすべて完了した。町役場・町教育委員会へあいさつを済ませ帰京。

調査期日 昭和53年12月14日～同年12月15日 2日間

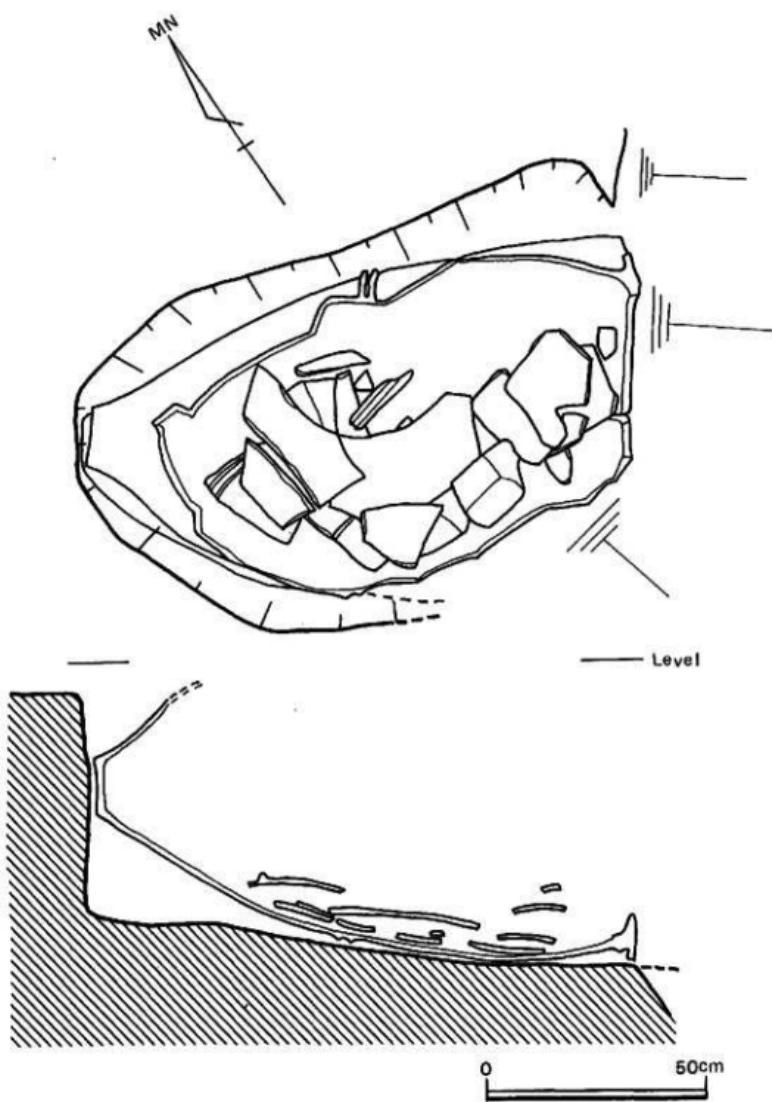


Fig. 4 船棺出土状況図 (JG)

4 龫棺 (Fig. 5, PL. 8)

大形である。器高120.0cm、最大幅80.0cmを計測する。最大幅は胸部中央部よりやや上位に求められる。突帯が口縁部に1条、胸部に2条貼り廻してある。刻目はない。底部は小さく作られており直径12.8cmを計る。流れのような器形はなかなか端整である。掘り出した直後の保存状態は良好であったが、その後風化が進み器面は相当に荒れていて調整痕の観察ができない。

5 墓壙 (Fig. 4, PL. 5・6)

一部が削り取られていて墓壙全体の計測値を記録できない。残存している部分での観察および計測値は次のとおりである。

前項でも述べたとおり、墓壙は基盤の軟砂岩を掘りこんでいるためか、無駄な労力を費さないで済むよう効率よく掘られている。甕の口縁部附近は削平されているが、一部の残存部から判断すると橢円形に近い。推定で長軸126cm、短軸90cmである。壙壁はほぼ垂直で深さは約50～60cmを計り、底面は東に僅かながら傾斜している。

残存部位の形状からみると合口甕棺ではなく単甕の可能性をも示唆している。

IV まとめ

農免農道工事により遺物包含層が損壊を受け、多くの弥生式土器片および少量の黒耀石剣片等の遺物の出土をみ、たまたま考古学に興味を持たれていた石丸助役の現場視察がなかったとしたら発見されなかつた帆崎遺跡である。道路工事によりその一部が破壊されたとはいえ、その大部分が烟地化されている丘陵上に残されている。不幸中の幸であった。附近一帯に散乱していた遺物は彼の指示により採集され、集結されていたとはいえるあまりにも細片であったし、工事区内の土工事が完了していたことから、今次の調査の対象を露出した甕棺にのみ絞った短期間の緊急調査であったことなどからして遺跡の性格づけを明確に行える程の所謂調査といえる調査は実施していない。單に甕（状況から判断して甕棺と決定して良いと考える）1基、別地点の箱式石棺1基の出土で簡単に埋葬址であると片づけるにはあまりにも早計のように思える。それらの空間を含めたもっと大きな全般的な捉え方が妥当であろう。

現在、行政的にみた小長井町は長崎県の東端に位置しているが、当時においては北九州文化圏の範囲に入り、かなり強力に文化の影響を受け、消化し、定着させたことが窺い知れる。とはいえ、現時点において、この甕が現地で焼成されたのか、あるいは何処からかの移入品であったかの結論づけは出来ないが、その大きさ、重量から推察して現地焼成説の可能性が強いと

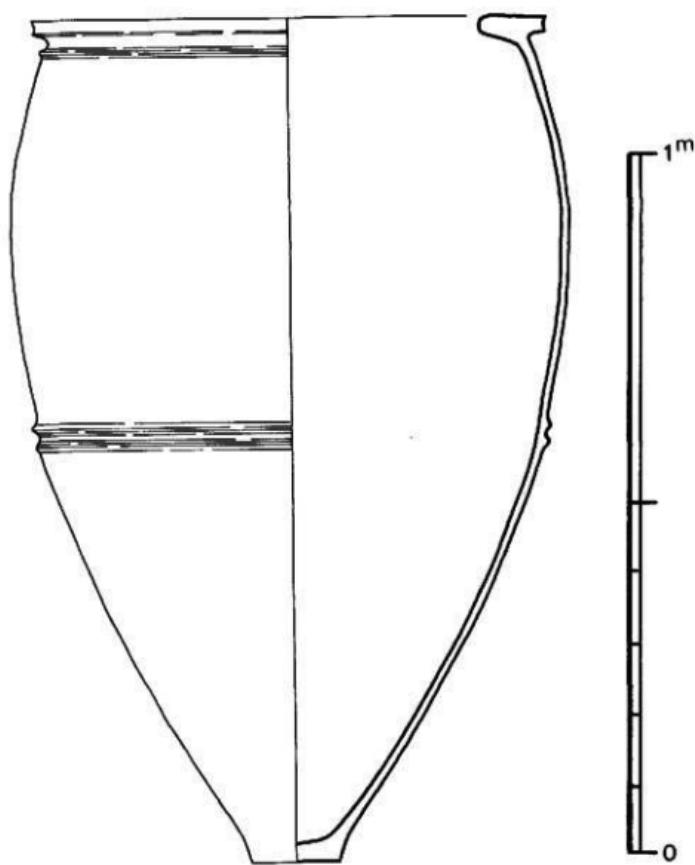


Fig. 6 堆積測圖 (34)

思われる。胎土の分析、焼成窯の検出等客観的資料の蓄積が先決であろう。

前記のとおり、帆崎遺跡の主体部は、丘陵のより南に求めることができ、今般発見の埋葬空間はその北限と考えられる。（遺跡地図では両者の区域が図示されているが、同一とした方が良いと考える。）それぞれ単基の出土であるが、それらが併せも複数的性格からみた場合、その周辺域にまだ多くの埋葬形態が埋蔵されているよう。

今回報告書を作成するにあたり、再度その現場を訪れてみた。その変貌ぶりには驚いた。例え如何なる名称の道路でも、舗装された広くて立派なものであれば、現代の諸事情下によりすぐ家が建つということである。ましてや道路の延長線上には集落があった。箱式石棺のすぐ前に1軒、さらにその家の斜め前方に1軒、計2軒建っていた。この状況をみてみると、そう遠くない将来この付近が家で埋ってしまうのではないか。遺跡は蚕食状態で漬され、気がついた時には滅失してしまっていたという結果を危惧する。また、そうあってはならないと文化財保護行政に携わるひとりとして今シミジミと反省しているところである。

参考文献

- 橋口達也（1979）「塚棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI 中巻』福岡県教育委員会
- 宮崎貴大他（1984）「今福遺跡Ⅰ」長崎県文化財調査報告書 第68集 長崎県教育委員会
- 田川 肇（1982）「長戸古墳・丸尾古墳」『長崎県埋蔵文化財調査集報V』長崎県文化財調査報告書 第57集 長崎県教育委員会
- 和島誠一編（1966）「日本の考古学IV」河出書房
- 津田繁二（1940）「我が長崎県の先史時代及び原始時代の遺跡・遺物の概略に就て」『長崎談叢 第26輯』

PLATES

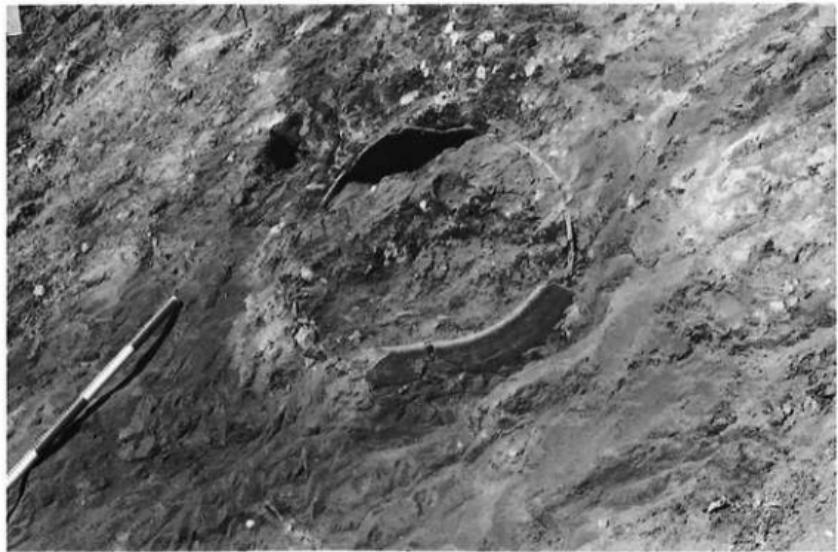


道路遠望（西より）

△印記化石層出土地
矢印箇所出土地



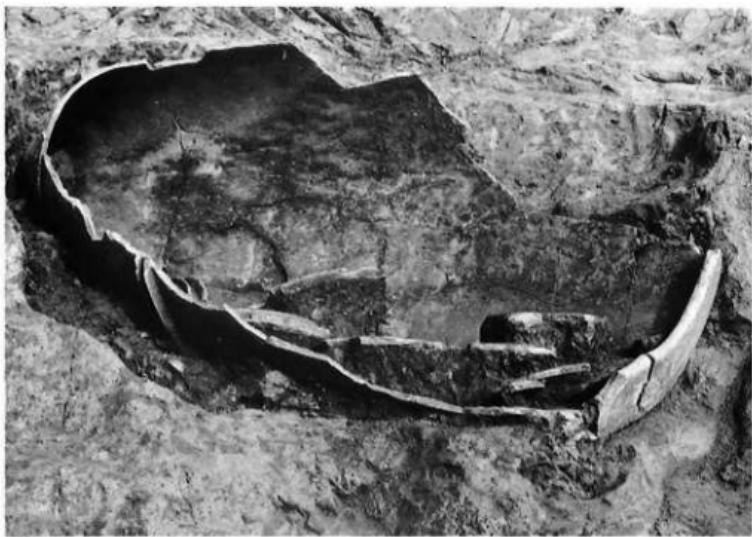
1 道跡近影（南より）



2 発見時の墓棺



1 出土状況（東より）



2 同 上（南より）



1 出土状況（北より）



2 測量終了後（同上）



1 出土状況（南より）



2 墓 墳（同上）



1 墓 塚(東より)



2 同 上(北より)



1 箱式石棺の木口



2 法面に露出している箱式石棺（矢印）



壺（復原）



実測風景

長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅷ

昭和 60 年 3 月 31 日

発行 長崎県教育委員会©

長崎市江戸町 2-13

印刷 出島印刷所

長崎市常盤町 1-32